
BLACK ROCK SHOOTER -PHANTOM-

モノクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK ROCK SHOOTER - PHANTOM -

【Nコード】

N0436S

【作者名】

モノクロ

【あらすじ】

親友のヨミを裏世界から連れ戻してから早数か月。
マトはB RSの出会いをただの夢だっと思った思い始めていた。
しかし、中学最後の春。少年との出会いをきっかけに日常は一変する。

B RS好きの作者が遂にやっちゃった!!
かなり後悔しつつも頑張りたいと思います。

2011/12/5 テコ入れ作業完了致しました!

Obverse プロローグ 終わりの夜、始まりの春(前書き)

初めまして。モノクロと申します。

今回、私の一番好きなB RSを駄文ながらも書いていきたいと思
います。

……処女作なのに、エラくハードルを上げてしまった。

という訳で、誤字脱字やアドバイス承っております。

荒らしや避難コメントは受け付けませんのでご了承下さい。

「この作品嫌い！」という方は、お手数ですが「戻る」ボタンを押
してください。

「おもしろそう!」という方は、お付き合い願います。

ではごっげー!

Obverse プロローグ 終わりの夜、始まりの春

一体、君は何処に行ったんだ？

逸^{はく}れてしまった手を、もう一度繋ぐ為に。
見失った君を、もう一度見つける為に。

「俺」は、光の中を歩き続ける。
迷子の君を見つけれ。あの日の願いを叶える為に。
何度世界を巡っても、何度過ちを繰り返そうとも。

この地に刻まれた、沢山の足跡。
その轍^{わだち}を一つ一つ辿ってゆく。
きつと、君に辿り着く事を信じて。

それは遠い昔だったか、それとも遙か先の未来だったか。
それすらも曖昧な世界で、君と俺は出会った。

美しい黒色に映える、神々しい蒼色の光を持った君。

ひと目見ただけで、俺は心を奪われていた。
その蒼く輝く光を纏う、君に。

とても美しくて、それでいて儂さを秘めていて。

手に入れたと思った。君の全てを俺のモノにしたかった。

そう思って、有ろうことが俺は

君に、闘いを挑んだ。

長い長い闘いだった。時計すら無い世界だったから、どれほどの時間を過ごしたかは覚えていない。

俺はその間に何人も仲間や部下を失った……君も同じように
同士達を失っていたけれど。

最後に残ったのは、俺と君だけ。この世界にただ二人きりだけ残った。

それがとても嬉しくて、でもほんの少し悲しくて。
俺が君を殺すか、君が俺を殺すか、後はそれだけだったから。
待ちに焦がれたこの瞬間が、あと少しで終わってしまうから。

悲しいか、と俺は問うた。

君は少し考えて、悲しい、と答えたね。

その時の俺は傲慢で自己中心的だったから、勘違いをしていた。
君も、このゲームが終わるのが嫌なんだって思っていた。

でもその答えはきつと、俺が望んでいた答えでは無かったんだろう。否、きつとそうだったのだろう。望まぬ戦いに君や君の仲間を巻き込み、そして多くの犠牲を産ませたんだから、当然だろう。

貴方も？、と聞かれて、馬鹿な俺は嬉しくなった。

君の全てを手に入れる為に始めた、この『ゲーム』を始めたのは俺だったから。

悲しいとか、怒ってるとか、そんな感情は持ち合わせてなんか無かった。

でも、そんな馬鹿げたゲームも、もうすぐ終わる。

ああ、と俺は正直に答えた。

そして、とても悲しい、と付け足して。

それを皮切りに、俺と君は決着を着ける為の戦いをした

今更だけど、君は俺の事をどう思っていたんだろう？

絶対に良いイメージは持っていなかっただろうけど。

でも、初めて出会ったあの時に・・・君に伝えれば良かったんだろうな。俺の気持ち。

そしたら、こんな関係にすらならなかったのかもしれない。争いなんか起きなかったのかも知れない。

それすら出来ない程、あの時の俺は狂ってた。狂気の沙汰ってヤツだ。冷静になった今としては、なんて馬鹿な事をしたんだろって毎日思う。

・・・こんな女々しい考え、君が聞いたらひっくり返るかもね。慌てふためいて、目を白黒させてる姿が目には浮かぶよ。

ああ、でももうそろそろお終いかな。

目の前が暗くなってきた、もう手足の指すら動かせない。仕方ないさ、油断してしまった俺がいけないんだから。

『君の勝ちだよ、おめでとう・・・』

地に伏した俺を君が眺めている。

蒼い光を纏って戦う君。そんな君が大好きだった。最期にそんな事、気恥しくて言えないけど。

『幸せに、なって』

敵ながら間抜けな最期の言葉になって、頭の片隅でボンヤリとそう思った。

でもこれは俺の本心でもあったから、言えて良かった。

じゃあね。俺の想い人。

もしも一回逢えるのなら、次は君の隣に居ても良いかな？

「では、これより始業式を始めます……。」

季節は春。

花は芽吹き、命が生まれる季節が巡ってきた。

「
でありますので、えー、中等部3年生の諸君等は中等部最後の行事の取り組みや勉強に励み、後輩達を引っ張っていき

「
終わりはあるのかという校長の長話に、集中力が切れて退屈そうに聞く者がチラホラ出てきている。中には春の陽気に耐えられずに密かに眠る者も居れば、久しぶりに会う友達とヒソヒソ話す者も居る。

「……ふわぁあ……」

この物語の主人公である黒衣マトも、久々に会う校長の話す子守唄おはなしと春の暖かさのダブルパンチにノックダウン寸前である。うつらうつらと船を漕いでいたと思えば、ハツと気づいて体勢を立て直す。いつもは居眠りは苦手教科の授業以外しかしない彼女なのだが、ここ最近は寝付きがかなり悪く、寝不足の日々が続いているのが常である。故に今現在降り注いでいる陽射しにやられかかっているのだ。

「……早く終わんないかな……」

退屈な時間ほど、これ以上の拷問は無い。

校長の話も佳境に入ってきたらしく、マトはとにかく頑張ろうと頭を左右に振って眠気を飛ばそうとする。この長話が終われば、後は校歌を歌って終わりだ。

暫く話に耳を傾けていたマトだったが、努力空しく、彼女の理性のダムは遂に決壊し、眠りの波に攫むなわれてしまった。

黒白の夜の世界。

其処で自分に似ている少女が巨大な砲身を持った『Rockannon』を片手に舞い踊る。次々と少女に襲いかかる髑髏とくろを蒼い炎を纏った岩石で撃ち抜き、破壊していく。

「……ねえ。貴女は誰？」

透明な壁の向こう側で戦う少女を観ながら、マトは少女に対して呟く。

彼女はまるで、鏡に映した自分自身のよう。

ただ違うのは髪の毛の長さ、人形のような無表情な顔だけだろうか。

左右の長さが違うツインテール、星のマークが付いたロングパーカーを身に纏い、美しい青色の瞳を持つ少女。

「……前にも言った筈よ、私は……………」

少女の言葉は其処で切れた。

「・・・いさん、黒衣さん、立って！」
「！！！」

後ろの女の子に肩を叩かれ、ハツとして頭を上げると、前後左右の生徒はピアノの流れる音楽に合わせて起立をしているではないか。しまった、寝てた！と後悔しても時既に遅し。

マトも慌てて起立し、すぐさま校歌を歌う。周りの女子がクスクスと笑っているのを気恥しく思いながら、先程の夢の内容を思い返していた。

あれは夢、だったのかな。

マトは中学2年の秋頃、つまり最近のことなのだが 不思議な体験をしたのだ。

きっかけは親友、小鳥遊ヨミたかなしの失踪から始まった。

彼女とは中学に入ってから仲良くなったのだが、突然ヨミが何も言わずに姿を消してしまったのだ。

両親も失踪した原因を知らず、遂には警察が絡んでくる程の大事になっってしまった。

マトも其れを気掛かりに思い、ケータイに連絡を入れる等して交信手段を取ってみたものの、彼女から連絡が入る事も無く、親友が居なくなっってから三日が過ぎた。

三日目の夜、マトのケータイにメールが届いた。宛先は行方不明のヨミからだった。

慌ててマトはヨミを探しに出掛けたが、彼女からのメールの内容は何も無く、空メールで送られていた状態だったので手掛かりと呼べるモノは何もなかった。

そんな途方に暮れたマトに、幸せの女神は微笑んだのだろう。空に浮かんだ蒼い星が燦然と輝くと、空から光が降り注ぎマトを包み込んだのだ。

突然の不思議な現象に驚いたマトの目の前に、その少女が現れ出たのだ。

その後の事を、マトはあまり覚えていない。

親友を助ける、その思いを胸に闇が渦巻く世界へ入っていった事しか覚えていないのだ。

気が付けば、マトは病院にいた。

心配して病院に来ていた母親から話を聞けば、ヨミを胸に抱え込んだ状態で気絶していたらしい。

マトはヨミはどうしたんだと騒いだが、彼女も同じように病院に居り、今は警察に事情聴取されている事を聞いて、マトは安堵した。

その後はヨミの両親が泣きながらヨミに説教していたり、マトが入室した瞬間にお互いがワンワン号泣しあったと、色んな事があったが、其れはまた別のお話。

今はヨミも元気だし、マトには色々と悩みを打ち明ける様になった。更には、2年生の時に新しく友達になったユウと仲良くなっていき、徐々にヨミは明るく積極的な性格になっていった。

それ以来、マトは少女には逢わなくなっていた。

彼女の手を借りる事は無いからなのか、はたまたあの時の出来事はマトの頭の中で起きた妄想だったのか。真実は定かでは無い。

しかしここ最近、夢の中で戦う彼女を見るようになってきている。まるで、何かの予兆の様に。

悪いことが起きませんように、と、マトは願わずには居られない。

「いや〜。まさかの爆睡とはね。」

「マトらしいっちゃらしいよねえ?」

「でもさ、そのまま寝かせときゃ面白かったのに!」

始業式が終わり、教室に戻ったマトは赤面していた……。仲の良いクラスメイトに寝ていた事がモロバレしており、今やイジリ話のスターとなっている。

「で、でも、先生に見つかったら黒衣さんが怒られるし……」

「い、良いよ、ノンちゃん。ありがとう……」

それでもマトを庇おうとする野崎ミツカことノン。

マトが2年生の頃に仲良くなった子であり、先程マトを起こした子だ。

発言はあまりしないが、いつも周りを気に掛ける優しい子である。

「それにしてもさ、なんでうたた寝なんかしてたのさ？」

「やっぱ部活？」

「ううんと、昨日はあんまり寝られなくて……。」

「ふーん？」

そして、クラスメイト達はマトの赤っ恥話から他愛ないTVについてへと方向転換した。

ようやく開放されたマトはホッとため息をついて、徐に携帯を取り出した。

その際に、青い星の付いたストラップがユラユラと揺れる。

親友と、お揃いのストラップ。

マトは長い溜息をついた。皮肉にも、今年はヨミもユウも同じクラスにならず、離れ離れになってしまったのだ。社交性のあるユウはともかく、ヨミは残念がっていたが、彼女にも新しい友達が出来たよ、と始業式が始まる前にメールが届いていたので安心した。

でも皆と離れるのは辛いな、と内心憂鬱のマトを他所に、担任の先生が教室に入ってきて生徒を席に座るようにと促す。先生の言葉にワラワラと蜘蛛の子散らす様に、先程マトを茶化していたクラスメイトたちも席に座っていった。

「始める前に聞きたい事がある！黒衣、昨日ちゃんと寝たのか？」

突然の担任の余計なひと言で、教室は一気に大爆笑になった。

マトは、今度は顔を青褪めながら思った。

今日はなんて厄日なのか、と。

O b v e r s e プロローグ 終わりの夜、始まりの春（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちよつと妄想が入っておりますので、不快になられた方、大変申し訳ないです。

感想、お待ちしております！

R e v e r s e 名も無き墓守の唄／＼黒き流星に捧ぐ挽歌／＼

何度目の咆哮サクヒだったろう。

何度目の慟哭ナミダだったろう。

君が倒れ伏した時、俺は何をしてやれた？

君が動かなくなった時、俺は何が出来た？

許されないのは解っている。

それでも、俺は前に進むから。

『・・・はあ、はっ、はあっ・・・!!』

さざ波の音が聞こえる。昔から大好きな、心が穏やかになる音。

でも、今の状態じゃ、とてもそんな気分になんかなれない。

『は、はあ、はっ、ど、どう……ど、ど、して』

自分の手が、勝手にガタガタと震えている。

手や顔に付いた黒い霧モヤの所為なのかな。見慣れたソレが、今はとても怖くて、恐ろしくて。

待ち望んでいた瞬間を、迎えられた筈なのに。

『な、んで、どうし、て……?!』

気づけばそう叫んでいた。目の前で倒れ伏した、私の『敵』に縋り付くかの様に。

沢山の同士を葬り去り、残虐な手口で私の全てを手に入れようとしていた、彼。

私の焰を畏れずに真っ向から戦いを挑んできた、彼。

そんな彼が、何故

『躲せた筈なのに、どうして……!!!!』

私と彼は、長い間戦ってきた。

互いの力はほぼ互角。今の今まで決着が着くなんて事は無かった。多くの仲間を失いながら、私は強くなるうと鍛錬を続けた。これ以上の犠牲を出さない為にも、彼を越えて、こんな哀しい戦いを終わらせたかったからだ。

ある日、彼の仲間が私達の所へやってきた。どうやら彼から伝言を預かってやって来たようだった。

《決着を着けよう。》

たった一言だけだったが、彼の本気が瞬時に伝わった。

長年、刃を交えた者同士だったから何となく分かってしまった。

漸く終わるんだ、そう思っただけで心配する仲間を置いて、私は彼の許へと単身で乗り込んだ。

そして、何度目か解らない戦いを繰り広げた。

刃と刃をぶつけ合い、拳と拳をぶつけ合いながら、やられればやり返す、そのサイクルを延々と繰り返して。

それでも私が幾ら強くなるうとしても、嘲笑うかの様に彼は私の目の前に立ち塞がった。

渾身の力で放ったキャノンも、気合を込めてぶつけた刃も、いとも簡単に受け流され、最終的に真つ二つに叩き折られてしまった。其処に超えられない壁がある事を知ってしまった。

自分の武器を破壊されて呆然とした所を、彼がすかさず攻撃を仕掛けて来た。

そして、何度も何度も私を殴り、斬り付け、蹂躪した。その暴行は、私が動かなくなるまで続いた。

私は絶望した。彼に適う筈が無いんだと、気付いてしまった。もう武器も無い、使えない。もう体が動かない、私は、彼に対抗する手段を失ってしまったのだ。

霞んだ視界で、何かが蠢いた。微かながらも足音が近づくのが解る。彼は笑っていた。クスクスと愉快そうに、まるで私を嘲笑うかの様に。

今の今まで彼に刃向かっていた惨めな存在を叩き潰せたのだ。さぞ観天喜地の思いなのだろう。

彼が持っていた剣を頭上に振り上げた。

ああ、私は殺されるのか。このまま、何も出来ないまま。仲間の無念も果たせないまま。

コイツに、こんな奴に、殺されて、残った仲間達も、皆、一緒に、グチャグチャにされるのか。

断片的な考えが、私を奮い立たせた。

これ以上、こんな奴の好きになんかせせない。絶対に。死んでしまった仲間の為にも。

そして、私は側にあつた細長い瓦礫を、彼に気取られ無い様にと、彼が近づくのを待った。

先に斬られる前に、心臓に突き刺す。そうすれば、確実に彼は死に至るだろう。

彼の腕がビクリと動いた。其れを合図に、私は無理矢理身体を起き

上がらせ、そして

ドスっ！！！！

彼の身体に刺さる、瓦礫の刃。

私は彼にソレが刺さった事を驚くよりも、彼が甘んじて私の攻撃を受け入れた事に驚いていた。

彼なら躲すと思っていたから。彼は注意深いから、私の最後の一手を潰しに掛かると思ったのに。

それすらしてこなかった。そう、今も剣を振り下ろしもせずただ立ち尽くしているだけだ、今なら反撃のチャンスなのに。どうしても、理解出来ない。

『……………どうして』

『……………』

『どうして……………躲せた筈なのに、なのに何で』

『……………』

彼が私の名を呼んだと同時に、剣が床に落ちた音が聞こえた。ガシャンと大きな音に気を取られていたから、一瞬解らなかった。

彼が、有ろうことか私の宿敵が、私を抱きしめたのだ。

強く、でも息苦しくもない、優しい力で。

ほんの少しの間、沈黙が広がった。

何故、と私は問いたかった。でも、その時何故か涙が出てきて。

悲しくもないのに、彼の体温がとても暖かい事に気付いてしまって、突き刺した筈の心臓の音が、酷く心地よくて、涙が出た。

本当は、私は待ちに待ったこの瞬間を望んでなんかいなかったのか
もしれない。

本当は、私は彼と

『君の勝ちだよ、おめでとう……』

その言葉に、ハッと我に帰った。気づけば、倒れた彼を胸に抱いた
状態になっていた。

そうだ、私は勝ったんだ。憎き宿敵である彼に。

でもどうしてだろう、嬉しくもなんともない。

『嫌、こんなの、私……お願い……』

傷口から靄が漏れ出している。この靄は私達の体内を循環している、
云わば血液の役割を果たしている。

だから、これが無くなってしまうえば、彼は

嫌だ、速くなんとかしないと。

どうしようと必死に考えてると、彼が私の頬を優しく撫でてきた。
愛おしそうに、労わるように。

今こんな事、誰かにされた事も無いから、どうしても戸惑ってし
まう。

『い、嫌、ヤダ・・・』

『えほっ・・・せに・・・げほっ・・・』

『・・・？』

言葉を紡ごうとしているが、余程苦しいのか、ゲホゲホと咳込んでいる。

彼が何かを伝えようとしているのは解ったのだけれど、あまりに小さな声だったから、聞き取るうと私は耳を彼の唇へ近づけた。

でも、彼が言った言葉は、今の私が一番聴きたくない言葉で。

『・・・シアワセ、に・・・なって・・・』

ああ、この卑怯者

そんな言葉を遣さないで、一緒に居て欲しいのに。

彼の手が重くなっていく。靄も空中に霧散していく、もう体から流れている靄も少なくなっていく。『・・・』

止めて、戻ってきて、お願いだから。

どうしよう。涙が止まらない、思考がグチャグチャだ、もうまとま
りが付かない。

『あ、やだ、嫌、だっ・・・ヤダ、ヤダ』

密かに聴かれていたらしい。
気が付かない程歌うのに集中していたか、と反省しながらも少年は
ゲストを見やった。

『そんなに唄が上手だとは知らなかったぞ、エイシエント。今度み
んなに聴かせたらどうだ？』

『まさか君に聴かれるとは思ひもなかったよ、レン……。』
『オイコラ、その名前で呼ぶな』

白の炎がプリントされた襟とフードで、あまり表情が窺えない。
だが、砂色の瞳と、小柄な体に不釣り合いな巨大な機械の腕。
不機嫌そうにユラユラ揺れる尻尾。

ストレンジス。

それが彼女の名前である。

『……。で？此処に来たって事は、監視の仕事は終わったって事か
な？』

『ああ、お前に言われた通りの事はやったさ』

随分と安い仕事を押し付けて来たな、としっかり文句も付け足され
る。

カシャン、と大きな音を立てて、少年
エイシエントの傍
に、黒い砂が入った小瓶が投げ込まれた。

ご丁寧にも硝子製の蓋がしっかりとビンの中身を封じている。エイシメントは其れを拾って、訝しげに中身を覗き込んだ。暫くの間、角度を変えたり中身を軽く振ったりしながら、中身を観察している。

そして ストレングスが退屈そうに尻尾を揺らしていると、漸く彼は口を開いた。

『僅かに《彼女》の力の残滓があるという事は・・・』

言葉を一旦区切ると、意地悪そうに彼の唇が弧を描く。してやったりの笑みを浮かべる彼に対し、ストレングスは一抹の不安を感じていた。主に今後の自分の安否についてであるが。

『始まるのか、この《ゲーム》の終わりが・・・！』

夜月の光を受け、黒い砂が淡く緑色に光る。その黒い砂を全て焼き尽くそうと、蒼い火の粉がフワリとビンの中を泳いだ。

『 B RSの復活?』

『それは本当か、エイシエント』

『ああ、レン ストレンクスがコレを持ってきたんだ』

場所は変わり、鉄橋の上。

黄金色の空にポツンと残る橋の上には、エイシエントの仲間が待っていた。

その仲間の一人である男に渡すと、彼は中身を吟味する。

彼には眼球といった器官は付いてはいない為目は見えていないが、代わりに触覚が鋭い為、其れを目の代わりにしているのだ。現に今も手で握ったり、指先で形を把握しようとしている。

余段だが、彼は2mを軽々と超えた巨大な体格を持っており、彼が小瓶を持つとどうしても小粒の小石の様に映ってしまう。

『ふむ、確かに・・・お前の言う通り、本物の様だな』

『? 何がだよ、ラーヴァ?』

『・・・全く、お前は鈍感だな。ほら』

ドクロの大男 ラーヴァは隣にいる少年に欠片をポイっと手のひらに落としてやる。

少年はラーヴァとは違い、一般的な体格である。

彼の特徴をあげると、背中に小さく生えた悪魔の翼と、銀髪の上に

巻かれた銀の星を模したラメが散りばめられたターバンだろう。袖のない黒のタートルネックと腰に巻きつけた白いツナギと、機動力を重視した格好をしている。

「コレが何だつて？ ストレンジス。全然何だか解らねえよ」

「いつもながら愚鈍だなフアング。まだ解らんのか？」

「……だって俺、感知能力に関してはテンでダメだし……」

ストレンジスの言葉に不機嫌になっている少年、名はフアングと言
う。

フアングは一通り眺めたであろう瓶を元の場所 エイシエン
トの手に戻した。

エイシエンは苦笑しながら、まだ解っていないフアングに説明を
する為に口を開いた。

「ソレね、欠片だよ。デッドマスターの。」

「……え？」

「あれ、知らないか？ デッドマスターが消滅したつて。」

「し、知らねえよ、そんなの……」

「ま、そうだよな。でも現にソレ、彼女の亡骸の一部を入れてもら
ったんだけどな」

「……う、うおおおおっ!!!??」

フアングは其れを聞くなり、慌ててラーヴァの後ろに隠れてしまう。
彼はこの中で一番そういうグロテスクな事が大嫌いなのである。

戦線では一番の斬込み隊長だというのに、だ。

そう、小瓶の中に入っている黒い砂は『デッドマスターの骸』、その一部分なのだ。

B R STMがヨミを助け出す際『デッドマスター』と『小鳥遊ヨミ^{たかなし}』、この二つの存在が分離し、ヨミは無事に救出されたが、デッドマスターの体は砂粒と化して消滅してしまった。それをストレングスが態々^{わざわざ}集めて小瓶の中に容れてきたらしい。それは解った。だが、ここで解りきった問題点が浮上する。

『んな罰当たりなモン、何に使うんだよ!!!』

そう、彼女の骸なんか使って一体何をするというのだ。

黒魔術か錬金術に使うならまだ解るが、生憎この世界にはそんなのは存在しない。

エイシエントが死体愛好家だったりするならまだしもである。だが、彼もそんな趣味は持ち合わせていない。

ならば、何に使うのか

。

『そんなの決まってるだろ
を探させるんだよ。』

デッドマスターに、『彼女』

エイシエントはそう言って、瓶の封をいきなり解いた。

キユポンと小気味いい音を立てた封を無造作に放ると、封を破られた口から中身の黒の砂が勢い良く解放たれ、空へと舞い上がった。その場にいたエイシエントを除く全員は、呆気にとられて宙を漂う砂粒を目で追う。

エイシエントが黒い砂に何か仕掛けたのだろうか。

『と、飛んだ?!』

『流石、自称《B RSの宿敵》と言ってる程だ。思った通りだな』
『どついつ事なんだエイシエント!説明しろ!』

フアングの切羽詰まった問いに、エイシエントは空中に飛散する砂粒を目で追いかけたまま答える。

やがて砂粒達は空中で形を形成し、一匹の蝙蝠コウモリの姿となった。

『さつき言つたら、あの砂粒はデッドマスターの一部だって。一部なんだから思念がそれに染み付いてもおかしくないだろ?話によれば、デッドマスターは彼女が破壊したらしいし。そうだとするなら、コイツは確実に彼女を血眼で探しに行くだろうし。いやあ、お手柄だよレン!』

『貴様と言つ奴は・・・』

『ちょ、ちよつと待て。つまり・・・亡霊の怨念を利用するって事か?』

『うん、そう』

あっけからんと答えたエイシエントにフアングは一瞬気を失いかけ

た。
何でそんなぶっ飛んだ考えに到れるんだ、と3人は心の中で毒づいた。

説明している合間にも、蝙蝠は身体が可動するのかを確認するように鉄橋の辺りを大きく円を描くように翔き始めた。

『俺達でも感知出来ない位遠くに行っちゃってるみたいだしね。レンの話じゃ、彼女はデッドマスターの根城にしていた地点から忽然と《姿を消した》って言ってるし・・・まあ、コイツの拠点地なんて俺等は知らない事ですし、お家に案内して貰おうかと』

『ちよつと待てエイシエント、コイツの根城へ向かうのか？コイツは《女帝》の配下なんだぞ、どんな罠があるのかも解らないのに・・・！』

ラーヴァの念を押しした言葉に、エイシエントは何も言わずにニツコリと無邪気に微笑みを返したのみだった。其れを見たラーヴァ達は硬直した。今の状況下では、彼の笑みは色んな意味を込めてかなりの圧力が掛かっているからだ。

まさか黙って従ってこい、という意味なのだろうか。

というより、寧ろ早く決断しろと顔に書いてあるのが明白である。

ラーヴァとファングは互いの顔を見やると、諦めたのか、深々と溜息をついてしまった。

『それじゃ皆賛同したって事で行きますか！ね、レン！』

『え、待て、私は……解ったよ。』

今の今まで我関せずの状態だったストレングスの肩がポンと叩かれる。

面倒はごめんだと後ずさる彼女であったが、上腕をホールドされて逃げ道を失った。

……どうやら彼女も同じように巻き込まれる前提の様だ。

『それじゃあデッドマスターン家に向けて、全速前進！』

蝙蝠が翔いた方向に向かって、4人は鉄橋から飛び降りた。

彼等にどんな関門が待ち構えているか、其れを知るのは、今は誰もいない。

R e v e r s e 名も無き墓守の唄／黒き流星に捧ぐ挽歌／（後書き）

ちなみに「墓守」＝エイシエント です。

裏世界の皆さんは中々喋ってくれないので、
勝手にベラベラ喋らせてしまいました。

切実に文才が欲しいと思った今日この頃orz

O b v e r s e 新たな来訪者（前書き）

結構話が長くなってしまった・・・！
長文注意！

Obverse 新たな来訪者

真つ暗な道を歩いていた。

何も見えない、何も聞こえない。

きつとこの道に広がる絶望の闇は、終わらない。

きつと、俺のやっている事は、無意味で、無価値で、無意義に等しい。

それでも。

それでも、俺は君に逢いたい。

「ヨミスターー」

「あ、マト。おはようー」

とある晴れた平日の朝。

マトはいつもの通り、近所の高台にある公園に足を運んでいた。
この公園はマトのお気に入りであり、親友の小鳥遊ヨミとの
待合せ場所でもある。

坂道を上り、更に長い階段を上りきると、マトと同じ制服を着たセ
ミロングヘアの少女が佇んでいた。

彼女こそがマトの親友の小鳥遊^{たかなし}ヨミである。

性格が天真爛漫なマトとは正反対でも落ち着きのある子であり、
普段はとても大人しく知的で真面目。勉学も優れており、運動面
はバレー部のキャプテンを務めている。今現在、最後の試合に向け
てチームの皆をビシビシ鍛えているのだとか。

「ごめん、ちょっと寝坊しちゃって〜」

「大丈夫だよ、まだ余裕は有るし・・・行こっか」

いつもの待ち合わせの時間を5分オーバーしてしまったが、ヨミは
気にしてない様だ。

親友の優しさに嬉しさを感じつつ、マトはヨミと並んで歩きだした。

その光景を、妬ましそうに見ている黒い物体の視線に、
彼女達は気づいていなかった。

「はい、席に着きなさい！チャイムはとっくに鳴ってるぞー！」

場所は変わり、教室。

マトは友達のノンと世間話で盛り上がっていたが、担任の登場によって話は中断された。

自分の席に座るように促され、いつもの様に出席を取る筈だが、何故か担任の表情が心成しか嬉しそうだ。それに気づいた生徒達は、担任のニタニタした笑いに戸惑いを隠せず、何が有ったのかとざわつく。

「おら、静かにしろー！出席を取る前に、ここで
転校生を
紹介したい！」

担任の言葉に、生徒全員が耳を疑った。何故ならそんな連絡は、学校集会や先生の説明にも無かったからだ。長い沈黙に包まれる教室。そして、誰かが堰を切った様に間の抜けた声を上げる。

「・・・え？」

「嘘！今時！？」

「転校生がウチのクラスに来るなんて聞いた！？」

「知らなーい」

それが合図となり、固まっていた生徒達はまたザワザワと話し始める。

中学3年の春に転校生などと、少し季節外れでは無いだろうか。

眉を顰めて疑っていると、担任がパンパンと手を叩いて生徒達を粛清させる。

「おら、静かにしろお前等！ホラホラ座れ、はしゃぐな！」

生徒達の異常な興奮を厳しく咎めると、先生は気を取り直して教卓から引き戸の方まで移動すると、「入っていいぞー」とドア向こうの転校生らしき人物に声をかけた。次いで、ガラガラと扉が開く音が、静まり返る教室に鳴り響く。

転校生が足を踏み入れた瞬間、マットを含め、生徒達は彼女の姿に目を奪われた。

腰あたりまで伸びた、美しい黒のロングヘア。制服の袖から伸びる艶やかな白い肌。スラリとしたモデルの様な長い手足。

身長は平均の女子よりも高く、見た目としては、ひどく大人びている印象を受ける。

そして何よりも 自分達よりも美しい明眸皓齒な顔立ちに、何処からか驚嘆の溜息が漏れる。

眉目美麗、金枝玉葉。彼女にこの言葉が当て嵌らないで何が当てはまるのだろうか。

担任は黒板に彼女の名前を書いた後、クラスの皆に簡潔に説明する。

「彼女は両親のお仕事の都合によって、この学校に転校する事になった。皆仲良くしてやれよー。ほら、自己紹介してくれ」

自己紹介を促された転校生はクラス全員を一旦眺めると、凜とした声で自らの名を告げた。

「くろがね 鐵カナコ と言います。宜しくお願ひします。」

転校生　　カナコは小さくお辞儀した後、押し黙ってしまう。

早くも自己紹介は終了した様だ。

クラスの全員は呆気にとられつつも、パラパラと拍手で転校生を出迎えた。

とても短い挨拶に、担任は「あ、そうか、終わりが早いな」と苦笑いしつつも、カナコに席に着くように促す。

その指定された席はマトの右隣。カナコは沈黙を守ったまま、その席に向かっていく。

その間のカナコに対するクラスメイト達のざわめきは半端ではない。九割九分が彼女の持つ美貌に対する称賛や妬みから来ていた。マトもカナコの魅力に心奪われていたが、ヨミ以上にクールな性格の女子がやって来る事に驚きを隠せなかった。

「……此処で良いかしら。」

「あ、あの・・・私、黒衣マト。今日から宜しくね！」

勇気を振り絞って、マトはカナコに挨拶をする。しかし、カナコはマトを一目盗み見ただけで、「ええ」としか返して来なかった。そして、自分の机に荷物を置いて自らも着席する。

返事に手応えを感じられなかったが、マトは休憩時間にも話し掛けてみようと思った。

そして短いHRが終了し、いざ話しかけようとマトはカナコに近づこうとしたが、残念ながらマトの席の周りは沢山の人でこった返していた。

「はじめまして！ねえねえメルアド交換しない!？」

「鐵さんって綺麗な髪だね、シャンプーとか何使ってるの!？」

「モデルさんみたいな体型だね！もしかして運動の賜物だったり!？」

・・・質問半分以上が美容についてであるが、クラスメイト達は転校生のカナコに興味津々のご様子だ。

矢継早に質問を投げ掛ける者も居れば、遠目で尊敬の眼差しを投げ掛ける者も居る。中には携帯電話を態々カナコの顔の近くに寄せてメールアドレスをせびる者もいた。

これでは近づけないじゃないか、そうマトは心の中で小さく毒づいた。

「凄い人気だね、クロガネさん」

「そりゃあ、まあ・・・綺麗だし美人だし、おまけにモデルさんみたいだし。良いよねえ、そういう人って人生得すると思うよ？あたしも美人さんに生まれたかったな」

「ふふ・・・黒衣さんったら面白い冗談だね」

「え！？酷いノンちゃん！私の人生お先真っ暗でも構わないと！？」
「あ、違っ違っ！黒衣さんは元々、その・・・」

ガタツツ！！

野崎の言葉を遮るかの如く、人気の渦中に居たカナコが唐突に席から立ち上がる。

マト達からの方では彼女の表情は窺えなかったものの、カナコは相当苛立った表情を浮かべて自分を囲むクラスメイトを睨みつけていた。

「御免なさい。私、口喧しい人達と話す義理合は無いの。だから早く席に戻るなりしてくれないかしら。今直ぐ、私の前から、立ち去って。」

カナコの底冷えとした殺気に恐れ戦いて中々立ち去ろうとしない少女達に、業を煮やしたカナコは一言一言丁寧に区切って、紅い瞳で彼女達をギロリと睨みつける。その目は正に獲物を見つけた捕食者の如し。

あんなに興奮していたクラスメイト達も、カナコの言葉に従って、蜘蛛の子散らす様に彼女の前から慌てて立ち去った。カナコは其れを見届けると、一仕事終えたばかりに髪を軽く掻揚げて席に座る。

「……す、ごい迫力だったね……」
「……うん、うん」

カナコの迫力に二人は怯えた。一見真面目そうに見えていたが、まさか殺人鬼の様なオーラを発するなんて思いもしなかった。巷で良く言われる、『美しい薔薇には棘が有る』というものなのだろうか。

だが、幾ら彼女達が鬱陶しかったとはいえ、あんな人払いの仕方は無いのではないだろうか。

「心臓が止まるかと思った……あれ、ノンちゃん顔真つ青だけど大丈夫？」

「だ、大丈夫、でもちよつとびっくりしちゃったかも……」

「御免なさい、迷惑を掛けたみたいで」

「ふあつ!?!」

マトと野崎はヒソヒソと内緒話をしていたが、本人にはしつかりと聞こえていたようだ。

だが話すキツカケは出来たので、ここぞとばかりにマトはカナコにお願いを試してみた。

「あのね、鐵さん……良かったらでいいんだけど、今日アタシ達と一緒に昼食べない？私、鐵さんの前の中学の事とか色々聞きたいな……なんて」

マトは警戒心を少しでも解そうと満面のスマイルでカナコを誘ってみたが、野崎にはマトが緊張で引き攣った笑みを浮かべているようにしか見えなかった。

カナコはマトの誘いに目を瞬かせていたが、彼女の不自然な笑みを見て、呆れた様に肩を竦ませる。

「別に構わないけど・・・聞いて得する様な事は無いと思うわよ」

「え？」

「貴方もさっきの見たでしょ。私、大勢の人達といえるより『独り』でいる方が好きなの。一人だと気が楽だし、口煩い人とかが近くで話してるとか、耳障りで苦手だし。だから前の中学じゃ交友関係とかはあんまりしてなかったの。他の人曰く、私って凄く寂しい人間らしいわよ」

「・・・そ、それでも！私、鐵さんにすっごく興味あるの！」

マトは鼻息を荒くして言うと、席から立ち上がってカナコの近くへと寄る。野崎は慌てふためいて周りをキョロキョロしていたが、マトは気にせずカナコに語りかける。

「このままの数ヶ月、誰とも話さないで終わるなんてつまんないよ！鐵さんもそんな事言わずに沢山友達作れば、きつとお喋りが楽しくなるよ！・・・それにねあだし、鐵さんとなんだか初めて逢った気がしないの！もしかして、前に何処かで逢わなかったかな？」

「前にも？まさか。私、貴方とは初対面」

「何処かで逢

った』?」

「うん、そう!なんか鐵さんに見覚えが有るような、そうでも無いような気がして……」

「……」

マトは率直な感想を述べたのだが、直ぐにしくじった事に気が付いた。カナコが頭の中にある記憶の網を手繰り寄せ、何処で逢ったかを思い出そうと黙り込んでしまったからだ。もし違っていたなら赤恥も良いところだ。

「あ、でも可能性での話だから、もしかしたらあたしの記憶違いかもだし!」

「……名前」

「え?」

「名前。さっき言ってたけど忘れたからもう一回、貴方は何て言うの?」

「えっと……マトだよ。黒衣マト」

カナコは「ふうん」と頷いて、マトの顔を盗み見る。彼女を値踏みするかの如く頭から靴の爪先まで丹念に見回すと、「そうね」と小さくつぶやいた。

「思い出した。私、貴方と逢った事あるわ。」

「え、本当!?ドコドコ!?何処であつたっけ!?!?」

「それは……内緒。教えてあげない」

「ええー！酷い、ずーるーいー！」

漸く解るかと思いきや、カナコの意地悪によって謎が更に深まってしまった。

後ろの野崎は頭にクエスチョンマークを浮かべて話を聞いていたが、マトが少し興奮気味になってしまったので後ろで彼女を宥めに入った。

話している内に1時間目を知らせるチャイムが鳴り、教科担当の先生が教室へと入って来る。

マトはカナコの言葉が気になって仕方なかったが、それを更に上回る事を彼女はやってのけたのだ。

数学の難問を易々と解いてしまう、英語の発音テストで先生顔負けの英語力を披露する、体育の授業でバスケット部の主将であるマトを軽くあしらって点差を着ける等々……の授業の中で圧倒的な実力差をクラス全員に見せつけたのだ。

文武両道。才色兼備。おまけに明眸皓齒の美少女。天は彼女に一物も二物も与えてしまったらしい。

マトは益々彼女の事が気になってしまふのだった。

場所は変わり、とある男子高校。

HRが後5分で始まるが、クラスの中は元気いっぱいの中が多いらしい。狭い教室で1対1のプロレスごっこをしている者や、コンビニで買ってきたのか友達と一緒に少年誌を読み耽っている者、トランプで賭事をしている者と、朝なのに昼休みの如く賑やかである。

煩くて堪らないな。

一番後ろの窓際の席に座っている少年は、イヤホンで携帯音楽プレイヤーで今人気の女性ボーカルの曲を聞いていた。だが、クラスメイトの大きな奇声の所為で曲の大半が聴こえない。彼女の歌声が小さいのもあるが、些かポリウムを落として頂きたい所である。

「マサー」

「.....」

「マサー、はよー」

「.....」

「.....おい、頼まれてたCD貸してやらんぞ」

「おはようございます火嶺君。」

少年こと、銀城雅^{ぎんじょうみや}はやってきた火嶺という大男に大袈裟な会釈をする時、

片手を彼に差し出した。火嶺は一瞬解らなかつたが、それが無言の催促だというのに気付くと、バッグから本屋のロゴが入ったビニール袋を雅に手渡した。

「サンキュー。金は後で渡す」

「おお。そんな事より聞いたかマサ。転校生来るって」

「聞いた聞いた。誰だか知らんし、このクラスに来るとしても関係無いけどな」

「冷めてんねえ。まあそんなモンかもな。中坊じゃあるまいし。」

雅はビニールからCDを取り出すと、してやっつたりの笑みを浮かべる。ボーカル名は『トガノ シオン』。

先程雅が聞いていた女性ボーカルであり、若年15歳で音楽業界にメジャーデビューした、今話題沸騰中の

アーティストなのだ。ドラマやアニメ、幅広いジャンルで彼女の歌が使用されており、老若男女、更にはオタク達からも熱烈な支持を受けている。そして雅もまた、彼女の歌のファンなのだ。

「何でそんなにソイツに執着すんだか理解不能だな。えーと・・・誰だっけ」

「てめえ・・・『トガノ シオン』の名前も思い出せないなんて、

お前の頭は腐つてるも同然だな。いい脳外科紹介してやるぜ」

「・・・あ、そうだそうだシオンだ。思い出した思い出した」

「・・・お前は俺の話聞いてたかな、火嶺え？」

火嶺は黙っていればクールで賢そうに見えるのだが、かなりだらしない上のんびりマイペースな性格なので、彼と歩幅を併せるのは少々大変なのである。話を聞いている様で聞いてない。仕事している様でサボっている。逆もまた然りなのだが、雅はどうも彼の様なタイプが一番扱いづらいと感じ始めている。

そんな火嶺がシオンのCDジャケットを見ながらボソリと呟いた。

「いつつもメソメソした哀しい曲しか歌わないから嫌いだな、俺。もう少し明るい歌唱えねえかな」

「馬鹿かテメエは！其処がまた良いんだろうが！みんな辛い事もあるけど、その悲しみを乗り越えて元気出そうぜって曲ばかりなんだからよー！」

「そうか？一通り聞いてはみたけど、なんつうか『私、悲劇のヒロインですう』みたいな、独り善がりみたいな歌ばかりだし・・・」

「お前はもう金輪際シオンを語るな！ど阿呆！！金払わねえぞ！！」

「えー」

ファンとして聞捨てならない言葉を言ってしまい、遂に雅の怒りを買ってしまった。

けれど火嶺にとってはこんなのはいつもの事で、何だかんだ言いつつ、後で雅が全額返金してくれる事を彼は知っている。何年も彼と腐れ縁をやっているからこそ、何となく解るモノである。

キーンコーンカンコーン

「お、チャイム鳴った。て事でさっさと席に着けノロマ。」

「センサー！銀城君たら学校にCD持ち込んで、馬鹿馬鹿馬鹿うるさいうるさいうるさい！」むー！！」

火嶺が巫山戯てCDの事を教室に入ってきた担任に告げ口しようとしたが、間一髪、雅が火嶺の口を押さえて口封じをする。他の所も

そうだが、彼等の学校は授業に關係ない物を持ち込むと指導室で説教を喰らう事になる。幸い火嶺の声は担任には届いていなかったらしく、指導室行きは免れたようだ。

「センサー、転校生来るってほんとスカー？」

一人の生徒が、やって来た担任に素朴な問いを投げ掛ける。

このクラスは体育会系の男子が半数以上も居る為、声が大きくてかなり耳障りなのである。雅はギャーギャー煩く騒ぎ立てる声を鬱陶しく思いながらも、担任の言葉を少しでも拾おうと耳を^{そはだ}敬っていた。

「そうだぞ。丁度このクラスに転入するぞ。だから皆の前で自己紹介

「やっべ、超楽しみだー!!」

「女の子？女の子とかか!？」

「お前少女漫画の読みすぎだって絶対」

「こらこら、静かにせんかお前等ー!! 時間押してんだからさっさと口閉じろ!!」

担任は騒ぐ生徒達を宥めると、ドアの向こう側向けて「入って良いぞー」と声を掛ける。

次いで、教室の引き戸が控えめに開けられた。

その瞬間、時が止まった。

男子達は唐突に喋るのを止めて、扉の方、その先に居る少年を一斉に見詰めた。

雅も火嶺もまた、扉から出てきた少年に釘付けとなっていた。

少し明るめで長さが短めの茶髪、男子とは思えない白い肌、ヘーゼルナッツ型の透明掛かった紅い瞳。

筋肉は運動部の人間と比べてそんなに量は付いておらず、一見するとヒョロリとした体型である。

そんな皆の注目の的である少年が、真っ直ぐ教卓の方へと一歩一歩近づいていく。

「よし、それでは自己紹介の方よろしく頼むぞ《鐵》。」

担任は転校生であろう少年の肩を強めに叩く。

あまりに強い衝撃で少年が耐え切れずに軽くよろめいてしまったが、「すまんすまん」と悪びれた様子もなく自己紹介を促した。

「えっと、鐵みかど帝みかどです。京都からこの高校へ引越して来ました。えー、まだこっちに慣れてない所もあると思いますが、どうぞよろしくお願いします。」

転校生

帝は一気に捲し立てると、軽く礼をし

て挨拶を終えた。クラスメイトも帝の紹介が終わると同時、パラパラと出迎への拍手を帝に贈る。なかには「可愛いー！」と変な野次を飛ばす者さえいたが。

担任は帝の席を指差して彼を誘導する。場所は雅の前の席であった。クラスメイト達はその席が如何にサボリや不貞寝に適しているかを

重々承知していた為、「羨ましいー！」とか「そこ代わってくれ！」等の野次を帝にぶつける。その後直ぐに担任が野次馬の頭を出席簿で叩いて回っていたのは言うまでもない。

帝は後ろの騒ぎを気にする様子もなく自分の席に到達すると、後ろの席に座っている雅に笑顔で挨拶する。

「えーと、どうぞよろしく。」

「……えっと」

「うーんと、この場合違うか……よつす！数年振り、マサ」

帝は態とらしく軍隊の敬礼をすると、破顔一笑の笑みを浮かべる。とても無邪気で、それでいて幼さを残す笑み。

全然変わってねえのな、コイツ

小学生の頃に突然別れたきり音信不通であった幼馴染の突然の帰還に、驚きを隠しきれない雅は「……久し振り」と返答するのが今の所精一杯であった。

「『みつちゃん』久し振り。」

「ホントに久々だな『カー君』！相変わらずジャイアントな身長してんのな！」

「背丈は両親譲りだからな。こればかりはしょうがない」

時は移ろい、昼休み。

火嶺と雅は帝を半ば強引に屋上に引き連れて昼食を取っていた。幼馴染である帝には色々と聞きたい事やら話したい事やらが山程有るのだ。男は過去を振り返らないと云うが、少し位小さい頃の思い出話に花を咲かしても良いだろう。もう一度再会出来たのだから。

「あつちどうだったよ？京都弁とか話すか、やっぱ」

「まあね。最初は都会モンだーって馬鹿にされたけど、段々と言われなくなって、後は平々凡々とね」

「へー良かったな。」

他愛ない話、学校の話、関東と関西の文化差の話

。。。

雅達は帝から色々な話を聴いたり茶化したりと、充実な時間を過ごしていた。

「そっぴやお前の妹さん、元気にしてる？」

「……………え？」

「あれ、家族全員で京都行ったんだろ？アイツもあつちで何か有っただろ。彼氏とか出来たとかよ！」

「妹……………あ、ああ、彼奴ね。別に、いつも通り傲慢不遜を貫い

てお出でで。」

帝はヘラヘラした笑いから急に疲れきった笑みに百面相する。

どうしたのかと二人が聞けば「何でもねーですよー」と、目が死んでる状態で乾いた笑いを浮かべる帝。

きつと触れてはならなかった話題だったのだろう。一体引越し先で何が有ったというのだ。

火嶺は話題を振った雅の脇を軽く小突いて、『話題を変える』と無言の命令を下した。

「ええつと・・・そういやあ、お前もあつちで彼女とか出来たのか？」

「え？彼女はあつちじゃ作んなかったし、それに・・・」

ヴヴヴヴヴヴ・・・

言葉を遮るかの様に、帝の制服のポケットから携帯のバイブ音が鳴り渡る。

帝は直ぐ様微弱に震える携帯を取り出すと、器用に文字盤をカチカチと操ってゆく。

「電話だったか？」

「・・・いや、只のメール」

「ふうん？・・・誰からだ？」

「噂をすれば何とかかんとかって奴でしたな」

火嶺の質問に対し、帝は携帯電話を雅達に見せる事で解答した。送り主は彼の妹からだった。

メールの内容は『こっちに来て、初めて友達が出来た』というものであり、ご丁寧添付ファイルまでも付けている。その中を開けてみると、数人の女子が肩を寄せ合ってピースサインをしている写真が貼られていた。

「へえ、良かったな。こんなに友達出来て」

「随分と楽しそうな奴等だな。特にこのツインテの奴」

「・・・先越された・・・」

「？ 何が？」

添付ファイルの写真を見て笑う二人を他所に、帝は一人、不安に満ちた表情を浮かべるばかりであった。

「さてと、愛しい愛しい恋人を取られちゃたわね。」
「・・・五月蠅いぞ」

黄金色の満月が照らす、夥しい数の十字架、それは土の下に眠る住民の群集の唯一の標。

其処に2つの素朴な黒い椅子と、二人の男女が居た。

男は項垂れる様に椅子の背凭れに全体重を預けており、一方女は堂々とした構えで足を組みながら座っている。

「《誓約書》^{オース}を見つけれなかったのは残念だったけど、《憑代》^{ヨリシロ}に嗅ぎつけられたのは幸運だったわ。このまま彼女との距離を縮めれば、《誓約書》^{オース}を見つけるのは時間の問題ね。」

「……」
「あら、黙り込むなんてらしくないじゃない。いつもみたいに冗談とか言ってみてよ。」

「俺を苛めんのがそんなに楽しいか、お前は……！」

男は後ろの女に向かって苛立ったのか刺々しい言葉をぶつける。悲痛と嫌悪に満ちたその言葉に、女は密かにほくそ笑んだ。二人は後ろを向いて話している為、互いの表情を読み取る事が出来ない。それ故に、女は勝ち誇った笑みを浮かべられているのだろう。

「そう簡単に諦めないでよ。さっきも言ったけど、私は《誓約書》^{オース}を見つけてないのよ。逆転のチャンスもきつと掴めるわ。」

「……だからって、男の俺に向かって『女子校に潜入しろ』と？」「バレたら当然不審者か変態扱いね。アンタの無様な逃走姿が見ものだわ」

「……無理に決まってるだろ、本当にバカだろお前！」

男は遂に頭を抱えて絶望に打ち拉がれる。女の言葉にかなりショックだったのか、上半身を折り畳んで少しコンパクトな体制になってしまった。暫くは立ち直りそうもないか、と女は男のフォローを諦め、また話し出した。

「駒も集めた、作戦も一応は立てた。後は盤上に並べて遊ぶだけ」

女は持っていた紅のキング　　チェスで使われているモノのようだ　　を後ろの方へと放り投げる。

クルクルと宙で回転する駒は放物線を描いて男の足元へと転がり落ちた。

男は項垂れた頭はそのまま、視線を転がってきたキングの方へ向けると、溜息をつきながら元の体制へ上半身を起こす。

「貴方も早く用意しといてよね。じゃないと《ゲーム》にならないわ」

「・・・解ってるよ。」

「私との約束の事も、解ってる？」

一瞬だけ、男は息を詰めかけた。それは動揺の表れか、はたまたその約束をただ忘れかけていただけだったのか。どちらにせよ、男は女の質問に「是」と解答せざるを得なかった。

「始めるわね、私と貴方のゲーム。」

「勝つのは俺かお前か、はたまた『彼女』か・・・」

「滅ぶべきは私か、貴方か。決める為の戦争^{ゲーム}を始めましょう！」

黄金の月明かりは二人を映す。

やがて訪れる災厄の真実さえもを照らし出す様に
。

O b v e r s e 新たな来訪者（後書き）

という訳で、出したかった転校生を先に登場させました。

デッドマスターの出番はこの後にあります！多分！！（えー

感想・アドバイスお待ちしております！

R e v e r s e 胎動する闇

黒い流星が空に流れる。

笑い合っていたあの頃の記憶を乗せて、尾を引いて。

その姿は一瞬で消えてしまうから、時よ止まれと誰かが叫んだ。

それでも闇を裂いて消えてしまった星に、俺は願う。

またこの空に、君よ在れと。

ガシヤリ。

何時ぞやかの鎖の音色が聞こえる。

首と手足が締め付けられて、思う様に動かない。

というか、全身に走る強烈な痛みの所為で思考自体が歪んでいく。

『何故だ？』

奴の声が頭上から降り注ぐ。

好い加減うんざりする位の回数になるであろう問い詰めに、俺は視線を少し上の方にして、奴を睨みつける。殴られた所為でちよっぴり裂けた唇を、三日月の形に歪めて、おどけて笑って見せる。

いつもの様に、ふざけた道化の様に。

『何故ヤツなんだ・・・何故私ではない。』

『何の事だよ・・・』

『恍けるな、あの虫ムシケラの事だ・・・!!』

奴は切羽詰った声で叫ぶ。余程余裕が無いのか、奴の顔には焦りの感情しか浮かんできていない。

やっぱり動揺するよなあ。俺達こんな事になってんだし。

『何故だ？何故、奴に肩入れをする？私とお前は同じだろう！ならば奴の首を獲る事が我々の悲願だっただろう、なのに何故お前は奴の側に寝返るんだ!!？』

『・・・は、言うに事欠いて其れか・・・』

『・・・っ!?!?』

俺の言葉に、奴は訝しげに此方を覗く。ソイツが持つ、俺と同じ色の目を疎ましくて、少しでも視線から逃れようと身体を擦る。

首に巻き付く鎖が軋んでギシギシと金属音が耳朶を打ち、軽く首を締め上げる。衝撃で息が詰まりかけたが、構わずに俺は言葉を紡ぐと乾いた口腔内を無理矢理唾で潤す。

『確かに俺はお前と同じだ。でも、それ以前に俺はお前が大嫌いだ!』

『っ!?!?』

『俺はあの子が大切なんだよ。一度は手に入れようと、過ちを犯した。でも今ならハツキリと解る!俺はただ、最初からあの娘の傍に居たかっただけなんだ……!』

俺は想いの丈を叫んだ。純粹な気持ちを全て吐き出す勢いで。

嘘偽り無い俺の叫びを響かせようと、世界は空間に音の紋あやを刻んでいく。

『もうあの娘を苦しめたくない、泣かせたくない!でも其れをお前等が邪魔しようとしている!あの娘の想いを、俺の願いを、これ以上踏み躪るのなら俺は一切の容赦はしない!』

最後の力を振り絞っただけの事はあったのか、奴は言葉を失って放心状態になっていた。

俺も思い切り叫んだから、体中が悲鳴を上げてる。大怪我してんに馬鹿だなあ俺……

次第に茫然自失の状態から意識を取り戻した。その印に赫の目には涙が浮かび、一筋の涙を音も無く流した。その時の奴の顔を言葉にするなら悲憤慷慨というのが妥当だっただろうか。とにかく端正な顔を醜くクシャクシャにして涙を流していた。

『……どうして、私もお前も同じなのに、どうしてこんなに歪ん

でる
『……』

そんなに呪わしいか。彼女によって別れた、その体が。そんなに厭なのか。彼女によって別れた、そのココロが。

悪いが、お前と違って俺は後悔なんかしていない。其処がお前との決定的な違いだ。

何方が大きく歪んでいようと、そんなのはどうでもいい。今はこうして《二つ》になってんだから。

真つ二つに分かれたココロをもう一度繋ぎ止めるのは、もう出来ない。

『……俺とお前を一緒にするな。』

『……！』

『俺は《エイシエント》だ。あの娘の騎士ナイトの役割を担う、ただの《エイシエント》だ。』

もう俺は、かつての俺じゃ無い。』

『……うあ、あ　　うあああああああああああ』

あああああああああ！！！！』

その瞬間の奴の、見るからに痛ましい顔を、俺は一生忘れることはないだろう。

奴が悲痛に満ちた絶叫をした後、俺の視界には大きな鉄の剣が振り下ろされているのが映し出されただけだった。

剣が視界を侵食したと同時に、俺の意識は闇の中に墜ちて行った。

『……シエント、エイシエント』
『ん……ん？』

肩を揺さぶられて、漸く俺は覚醒した。

景色は今見ていた青と黒の市松模様の世界から、夜闇に包まれた岩場の上に変わっている。

どうやら、いつの間にか居眠りを決め込んでいたらしい。仮にも自分がリーダーだというのに、この体たらくでは情けないものだ。

まだ眠たい目を軽く擦りあげながら、起こしてくれたラーヴァを一瞥した。

『……悪い。気が緩んでた』

『全くだ。敵の根城に着いた瞬間に倒れるとは。全く、リーダーなのにこの体たらくときたら……まあ今迄休憩も入れずに走りっぱなしだったからな。俺達も今後の為に少し休んだ方が良くかも知れん。』

『そうだな、ここまで来たらいつ何時襲われるか解ったモンじゃない。』

ラーヴアは俺の隣に腰掛けると、懐から小さな　　ほんの一欠片に見える　　弾丸の形をした黒い石を取り出すと、腕に仕込んでいた重火器に其れを装填していく。

『念入りだねえ』

『お前等と違って俺は支援サポート向きなんだ。弾切れなんて起こしたら事だろ。』

『あはは・・・確かに』

俺はポールアックス、ストレングスは機械のアーム、フアングはアーミーナイフ。

3人共、近接用の武器だから・・・。コイツは体中に色んな重火器を仕込んでるから、一応弾切れの心配は無いと思うが、本人曰く『昔、弾薬を消費し過ぎて危ない目に遭った』らしい。乱射トリガーハット中毒症状にでもなっていたのだろうか。あまりコイツ等の過去を詮索した事は無いから解らない。

誰だつて知られたくない過去や秘密だつて有るんだ。其れを引きずり出す真似はしたくないし、コイツ等もそんなの望んでない筈だ。なら、現状維持で放置するのが一番良い。

『そついやフアング達は？』

『俺がお前のお守りをしてる間に、二人が蝙蝠が行った先を見に行つてる。』

『そつか・・・悪い事したな』

自分の体の弱さに思わず苦笑する。絶対帰ってきたら、あの二人にたっぷり文句を言われるに違いない。

というか、此処に来てから倒れた記憶さえ無いとなると、いよいよ俺やバイんじゃないか……？

まあ仕方ないさ。そろそろ『時間』が無くなってきているって証拠なんだろう。それまでにあの娘と一緒に、アイツとの《ゲーム》に勝たなくては

そして今度こそ、間違いなく俺を……

『……シエント？エイシエント！』

『！』

『どうした、ボーツとして。まさかまだ具合が悪いんじゃない……』

『ああ、すまない……何でもない。ちょっと考え事してただけさ』

心配するラーヴァの優しさと労りに感謝しつつ、俺は戦斧の柄を杖変わりにして立ち上がる。ラーヴァも準備が済んだらしく、俺の方を心配そうに見ていた。

だが休憩も程々にしとかなないと、二人に小言を言われてしまいそうだ。ラーヴァは『まだ休め』と言ってくれたが、これ以上は更に迷惑を掛けると思ったので、もう平気だとだけ言っておいた。

『さて、二人は何処かなつと……』

蝙蝠の後を追い掛けていった二人を探そうと、俺は手の平に全ての神経を集中させる。

頭の中で、手の平に焰が灯るイメージを創り出し、其れが現実になる様に念じると、俺の手から真っ赤な焰が音を立てて燃え上がった。

『何時見ても不思議だな。焰を出せるのは《流星》だけかと思っていたが』

『んー、気が付いたら出来てたってヤツかな？というか、そんなに焰を灯せる奴が居ないのか？』

『俺が知っている限りでは、焰を操る《イクリプス》はお前と《流星》、《女帝》位しかおらん。』

俺はへえ、とだけ返事を返すと、揺らめく焰に対して更に念じる。俺の思いに呼応する様にグラグラ揺れていた火が突如、風に靡いている様にその身体を傾けさせる。

『あつちだ！』

『これもまた凄いモノだな、二人の行った方位が解るのか？』

『まあね、コレはアイツ等の行き先を告げてくれるけど、畏とか敵とかは教えてくれないからね。其処まで細かく念じて無いから』

『・・・お前、祈禱師シヤーマンか何かだったか？』

『否、ただの一介の騎士ナイトで御座いますよつと！』

焰が示した方向へと俺は先に走り出すと、一拍置いてラーヴァも慌てて追いかけてくる。

遅れた分を取り返す為にも、先ずは二人を探さなくては。さて、二人は何処まで行ったのかな？

『……………』

『……………』

『……………どうすっかな……………』

『どうするか、では無いだろう。何で此処まで侵入してしまったんだ』

『いやあ、だって蝙蝠フクロウが……………』

『《放置しておけ》と言った筈であるうが……………!』

ストレンジスとファングは不味い状況に居た。

事の始まりはほんの数十分前。

デッドマスターの根城に辿り着いた所から始まっていた。

『おお……………あのデツカイ城みたいなのが、デッドマスターの……………』

広大な地平線にポツカリと空いた巨大な穴。

その中には所狭しと並ぶ自然石や鉄で出来た石造りの建物の群集。まるで一つの街である。

今はその殆どが崩れており、ストレンクスが言うには、偵察に行ってきた時よりも原型を保てていないと言う。

『成程・・・此処が《^{ロストタウン}喪われた街》。遙か大昔、俺達の同胞が暮らしていた憩いの街・・・』

『伝記通りで有るなら、我々の軍勢が負けた後は此処を《女帝》の軍勢が乗取った筈だが・・・この廃墟をデッドマスターが根城にしてたのか。』

『つまりは厄介払いして独り占めってコトだろ？ひつでえ話だな、そりゃ』

フアングはロストタウンの景色を眺めながら呟く。ラーヴァが言うには、自分達は長い間、二つの勢力に別れて戦いを繰り返していたという。彼等が戦った時間と年月は、気が遠くなる程のモノであり、多くの犠牲と無数の哀しみを生み出し続けてきた。

だが、二つの勢力をそれぞれ纏め上げていた《王》　　つまりは大将が、とある日を境に忽然と姿を消したのだ。それは決着が着いたわけでもなく、拳銃互いが尻尾を巻いて逃げたわけでもない。ただ行方不明となっただけなのだ。彼等が居なくなっただ事で戦争は混乱を極め、終いには両方の勢力は仲間同士で根も葉もない噂話に惑わされ、かつての戦友達を疑い疑心暗鬼に陥り、自滅という形で幕を閉じた。

今は《女帝》側に動きが見られている為、エイシエント達も動かざるを得ないのが今の現状である。

『まあ今はその主も居ない只の廃墟だ。さっさと降りて、彼女を確

認

『

エイシエントが言うや否や、彼の膝がガクリと落ちる。
三人が一斉に彼の方を振り向いた瞬間、エイシエントは地に倒れ伏してしまった。

『エイシエント！』

『どうした、しつかりしろ！』

ストレンジスが悲鳴染みた声を上げる。ラーヴァが慌ててエイシエントの方へ駆け寄ると、大柄なその巨体を駆使して彼を軽々と持ち上げる。ファングとストレンジスは持ち上げられたリーダーの安否を心配していた。

『大丈夫なのか！？』

『・・・気を失っている。もしかしたらデッドマスターの亡骸に掛けた術、かなり負担を掛けるモノだったのか・・・？』

『どうする？此処で時間を潰すか・・・？』

『否、コイツも言っていただろう。俺達には時間が無いんだ、先に進んだ方が良いだろう。俺はコイツの面倒を見るから、お前等はロストタウンの地下に下りて、デッドマスターの住処を探せ。《流星》の力の名残がある筈だ。』

『解った！頼むぞレン！』

『お前までその名前と呼ぶのか！いい加減にしろ！！』

ストレンジスとファングは二人仲良く

とは言えないが

蝙蝠が迷い込んだロスタウンの内部へと入っていったのだ。

それが不幸中の不幸、泣きっ面に蜂、弱り目に祟り目となってしまったのか。

今は其れを知る術はないが、コレだけは言える。

『調子に乗って最深部まで潜るから迷子になるんだコノ大馬鹿者！』

『！』

『「はあ！ー！』』

結局、二人は迷子になっていた。今は徒広い廊下と階段、その先に3つの巨大な出入口が有る場所に出ていた。最初はファングが先陣を切って歩いていたのだが、徐々に怪しい場所に出始めたのが運の尽き。

どうやって此処まで来たのかも、引き返そうにも当てずっぽうであつちこつちを行ったり来たりしていたので、正確な位置は誰も知らない。逃げようにも逃げられぬ、正に此処は『奈落の底』。

『おおお……《Ogre Arm》で殴んじゃねえよ！』

『五月蠅い！お前の所為で出口も解らなくなつたし、《流星》の力も微弱にしか感知出来ない！無駄骨だ！！』

『？でも《流星》の力が感じられんだろ？収穫じゃないか。』

『人の話を聞いていたのか！？そんな事は百も承知なんだ！何故かつて？私が其れを見たつて事をエイシエントに報告したからだ！！解るか！！？』

『お、おう……』

ストレングスの剣幕に負け、ファングは2、3歩後退る。
だが、未だ燃え滾る怒りをぶつけるストレングスはファングにツカ
ツカと詰め寄って言葉を繋いでく。

『だが、此処で《流星》の姿が消えたんだ！何かしらの術か何か有
るに違いないから、其れを探しに今迄亡骸を使って此処まで来たん
だろうが！！』

『そ、そりゃあそうだが！知ってたよ、でも今その力が微弱に感じ
られんだろ？！だったら……』

『探そうにもどっかの誰かがひつちやかめつちやかに探し回った所
為で、場所が何処だか特定するのが難しいんだよ！！』

ストレングスは怒りを自身の武器《Ogre Arm》に込め、そ
の鉄の掌を器用に動かし、拳骨を作り出す。

そしてもう一度、ファング目掛けてソレを振り下ろす。瞬間、何か
固い物がゴスつとぶつかる音が訝した。次いで、情けない悲鳴が後
を追う様に尾を引いた。

碧色の空に有る大聖堂。その壊れきった廃墟を舞う一匹の蝙蝠。

聖堂の中は意外に破壊される前の原型をかるうじて保っていた。無数の斬撃や弾痕の傷痕が床や壁に大きく刻まれてはいるが、それでも崩れずにその姿を維持できているのは、ほぼ奇跡に近いのではないだろうか。

その様子を見て、この城の主はどこか満足気であった。このような猛攻を凌げる程に我が城塞の守りは堅いのだと。しかし、憎き仇敵が自分の領域へと侵攻しまったが為に、此の城は落城せざるを得なかったが。

憎いにくいニクイ

蝙蝠は苛立ちをぶつけるかの様に黒い羽を透明な空気に強く叩き付ける。

それでも羽撃きが強くなっただけで、何も変わらない。蝙蝠は更に苛立ちを隠せなかった。

何故、自分がこんな姿になっている？

何故、自分の城がこんな酷い事になっている？

何故、自分の存在するべきモノを奪っていった？

理由は彼女には理解出来ない。だが許せなかった。全てを奪った、あの蒼い炎が。

怒りに任せてバテてしまったのか、嘗て自分が座っていた王座の肘掛けに止まって身体を休める。

だが、途端に蝙蝠の体は闇の中へと攫われた。何が起こったかも解らぬまま必死に逃げようともがくが、思いのほか体の自由が利かず、唯一外にはみ出している黒い羽が、ヒョコヒョコと頼り無さ気に動

くだけである。

『漸く見つけたぞデッドマスター。随分と探したぞ』

静寂の世界に鳴り渡る、無邪気かつ重圧的な声。かつては主が座していたであろう玉座に、エイシエントの姿に相似した少女が座っていた。

黒のロングヘアに生えた赫い角、黒い骸骨を思わせる長い指……そして、熟した林檎の様な真つ赤な瞳。

彼女の名は《ブラックゴールドソー》。《鐵の女王》、《殉職する刃》、《血塗れ女帝》と幾つもの通り名を持つ、《イクリップス》の頂点である。

『ふむ。やけに矮小な器に押し込められたモノだな。魂の欠片を黒岩に容れて、術で強引に封じたという所だな。エイシエントめ、何処までも油断ならん奴だ……』

ブラックゴールドソーは独り言つと、ふと小さく笑った。

その笑みは誰に向けられたものなのか、そしてその真意は何なのか。其れを知るのは彼女以外誰も知らない。

そして、ブラックゴールドソーはなんの前触れも無く、手で閉じ込めていた蝙蝠を

何の慈悲もなく、グチャリと勢い良く握り締めた。

力を籠めれば奇怪な音を立てて折れ曲がる物体に、少女は甘言を囁いた。

「 奴に復讐したいのだろうか？もう一度、此処に存在したいのだろうか？ならば私が力になってやる さあ、殻を破ると良い！」

祈る様に握り締めた手から、血の色に相似した赤い光が放たれた。やがて光は大聖堂を飲み込むと、色鮮やかに残っていたステンドグラスをシャンデリアを粉々にしていき、小さな欠片に変えてしまった。壊れずに残っていた瓦礫の建物も、光が起こす不可解な現象によって切り刻まれ、形を徐々に失っていく。

「 赫の軍勢の長、《ブラックゴールドソ》が告ぐ！憐れな境涯を迎えし者、無慙の血刀を其の身に受けし者よ！汝を閉じ込める墓の顎^{アキト}をこじ開け、我が許へ来い！！！」

ブラックゴールドソーは大声で言霊を叫ぶと、収めていた赫い光を宙へと放り投げる。光はやがて聖堂の天井まで浮かぶと、次第に其の体を大きく熟させ、実らせてゆく。

パキ、バキバキ、パキンッ！！

赤い光から亀裂が入った瞬間、黒い手の様な形をした花が開花した。やがて花はグングンと自らの茎を精一杯に伸ばし、人の形と成した。黒い骨の角を生やした、女の悪魔。

『さあ、目を開ける！眼前に控える鎖を引き裂け！！今こそ、自由を手に入れる時だ！！』

ぐ、バアアアアン！！

ブラックゴールドソーの言葉に呼応するかの如く、光は自らの体を爆散させた。

Reverse 小さな休息

ブラックゴールドソーが現れたのと同刻。

ストレンジスとファングは聖堂の近くにある広間へと足を運んでいると、聖堂の中から真つ赤な光が外に向かって放たれているのを二人は目撃した。轟々と鳴り渡る、悪魔の優越に満ちた笑い声を具現化した様な光。其れを見て、ファングは自身の肌が恐怖で粟立ったのを静かに感じていた。

『・・・何だ、今の?!』

『この気配、まさか・・・《鐵の女王》!!!?』

『なんだと!?!?』

ファングはストレンジスの言葉に耳を疑った。まさか敵の親玉がこんな場所に来るなんて思っていなかったからだ。だがこんな時に冗談をかませる程の余裕が有るはずがない。それに、感知能力が無いファングでも感じるのだ。

底無しの、生者を飲み込む墓の顎。アキト

無限に生えるその牙の切っ先が、二人の皮膚に優しく食い込んでいく感覚が。

まさか行動を先読みされていたとでもいうのか?

否、それにしておかしい。

それならば今此処で敵に囲まれていてもおかしくは無いが、今はこの周辺には誰もいない。ストレンジスにその事を尋ねると、気配は

女王とデッドマスター以外には何も、と返答が返ってくる。

『じゃ、一体何が目的なんだ……!?!?』

『……憶測で言わせてもらうが、フアング。私達は早目に此処から撤退した方が良さそうだと思うんだが。』

『えっ?』

『デッドマスターと《鐵の女王》、二人が同じ空間に居るのを感じる……それに、《女王》が何か術を使っているのも感知できる

なあ、聞いてて嫌な予感がするだろう?』

『……それって、まさか……』

其れを聞くなり、二人の背に冷や汗が流れる。暫く彼等は沈黙していたが、バクバクと高鳴る心臓の音がBGM代わりに空間に鳴り響く。

ヤバイ状況下に足を踏み込んでしまった。

そう二人は心の中で呟く。こんな事になったのは一体誰の責任か、と今更ながらの後悔もだが。

この状況下を打破する方法はただ一つ。『逃走する』事であった。

一介の歩兵が^{ボン}女帝に^{クイン}勝とう等、笑止千万。彼女には圧倒的な力が有るのだ、対した戦力も無いままに攻撃を仕掛けたりすれば、返り討ちどころの話じゃ済まされなくなる。

二人は互いを一瞬見合つと、一斉に後ろを振り向いた。どうやら彼等の息はピッタリ合っていた様だ。

『逃げろっ』

『一体何処へ行くのかしらあ？』

ファングの絶叫に被さる、とても甘ったるくて妖艶な声色が紡ぐ、もう一つの言の葉。

其れはストレンクス達の頭上から雨の様に降り注ぎ、やがて脳の中
枢へと浸透するその雨粒は、彼等の判断能力を一時的に鈍くさせる。
逃げようとした足がビクリと不自然に痙攣したのを見て、悪魔は愉
悦に満ち足りたとばかり唇を三日月の形に歪めた。

瞬間、斬撃の嵐。

何処から音も無く現れた三日月の刃達は、空を華麗に舞い地を滑る
様にして走り出すと、迷わず獲物の身体にその爪を突き立てる。刺
さった皮膚からは黒い靄が尾を引いて外へと溢れ出し、獲物達を痛
みで感覚全てを狂わす。

『ぐあっ！』

『つくう……！』

ストレンクスは辛うじて斬撃を両碗の機械で防いだ御陰で軽い掠り
傷だけだったが、防御するモノが無かったファングは、脇腹に長さ
人差し指位の怪我を負わされていた。

斬撃の嵐が止んだ後、ファングは片膝を着いていた。彼の抑えた手

の間から霧が空中に漂う。

ストレンジスが其れを見て此方に駆け寄ってきて、傷の具合を見る。霧は大量には出てはいないが、傷口が思った以上に大きく開いている。一刻も早く治療せねば、危険な状態に陥るだろう。

『済まない、ファング・・・』

『・・・俺は良いから、今はアレに集中してる・・・』

息も絶え絶えにファングは目の前を顎で指す。その先を目で追って行けば、エイシエントの術で蝙蝠へと

姿を変えられた死者

デッドマスターが其処に

居た。

『あらあら御免なさいねえ？ひっさしぶりに身体を自由に動かせる様になって、嬉しくなっちゃって』

言っている割には悪びれる様子もなく、デッドマスターはケタケタと二人を嘲笑う。

その妖艶な佇まいと言い、特徴的な角と髑髏の手と言い、全てが生前の時と同じ姿だ。そうなると、ストレンジスが感じていた術は死者を復活させるか、物体の完全コピーのどちらか二つに絞られる。

『・・・貴様、デッドマスターか』

『あはは、愚問ね。ついさっきまで追い駆けっこした仲だったじゃないの。』

『・・・・・・・・』

喉をクク、と鳴らすデッドマスターを訝しげに見ると、脳内で考えをまとめあげていく。

記憶が有る、となると後者の術では無さそうだ。外見をコピーしていたならまだしも、記憶までもコピー可能ななんて聞いた事がない。だからと言って死者を生き返らせるなんていうのも聞いたことがないのだが……。

『それよりも、貴方達に今迄のお礼をたあっぷりお返ししたいのだけれど、どうかしら？』

『生憎と時間が無いのでな。出来れば御免被りたいのだが』

『あらあら良いの？そんな事言うなんて』

随分

と嘗め腐ってんじゃないのよ』

『・・・・・・・・っちィ・・・・・・・・』

デッドマスターは笑顔から一変、底冷えとした目でストレンクス達を睨みつける。どうやら怒らせてしまったらしい。

デッドマスターは黒く長い爪を前方に差し出し、一・二回内側に曲げる。『かかって来い』という合図。

ストレンクスは小さく溜息をついた。思ったとおり、戦闘は回避できないらしい。ならば、やるしかない。鋼の腕を器用に動かし、巨大な拳を作り上げると真っ直ぐデッドマスターを見据える。

そして、ヒュ、と風を切る音と共に

『はあっ！！』

怒号に乗せて、気合を込めた掌底が『撃ち』込まれる。水鉄砲の様に押し出された空気が見えない弾丸へと変化し、勢い良くデッドマスターに向かって放たれた。

だが彼女の攻撃のモーションからワントンポ遅れて上方へと回避。空気の砲弾はデッドマスターの元居た地点をすり抜け、その後方に有った聖堂の壁にどデカい衝撃音を発しながらぶつかった。

『ちよ、それは反則でしょ！？』

『せい！』

デッドマスターが地面に着地すると同時、ストレンクスは彼女の目の前まで肉薄すると、正面から中段蹴りを身体に叩き込む。くの字に折り曲げられた身体は数m先まで飛ばされ、やがて地へとゴムボールの様に叩き付けられる。しかしストレンクスは手を抜かなかつた。直ぐ様彼女に駆け寄ると、デッドマスターの頭上へ落下し、鉄の拳を思い切り振り上げる。

だが

『レン、危ねえ！』

『！？』 『あがつ！』

ファングの叫びが訝する。

その瞬間、ストレングスの身体は強い衝撃と共に真横へと吹き飛ばされてしまう。ストレングスは自分の身に何が起きたのかも解らぬまま、身体ごと地面へ跳ね飛ばされ、放り投げた人形の様に叩き付けられた。

『レン、大丈夫か！？おい、しっかりしろ！レン！！』

『つくう……一体、何が……？！』

いつの間にかファングが自分の傍まで駆け寄ってきていたらしい。ストレングスは両腕のアームに備わっているセーフティを一旦外すと、一番痛む頭を抑えながら辺りを見渡す。どうも頭を強打したらしいのか、視界がボンヤリとする上に酷い眩暈めまいがしている。

『おやおや、これはどうして』

まだ息の根が有

ったか、野良犬風情が』

デッドマスターとは違う別の声。剛毅で凜とした響きと共に、走る恐怖と絶望。

ストレングスの息がヒュ、と止まりかける。傍にいるファングも、恐怖で呼吸がガタガタと震えていた。

『寝そべっていないで立たぬか、デッドマスター。』

『いったあ……また死んだかと思っただわあ』

『調子付くからだ。剩おぼえ、身体がまだ器に馴染んで居らんからな。』

遠くでデッドマスターが身を起こすのが見えた。軽い外傷しか負っているが、それでも対したダメージを与えられていない。

それよりも、デッドマスターを見下ろす少女
赫の角と瞳を持つ、身の丈程の大剣を持つ少女

『鐵の女王』、ブラックゴールドソー。

『さて、お前等の飼い主が来るまで時間がある。その間は我に戯れ
ている、狂犬共』

《女帝》は来る者は拒まずと言わんばかりに両腕を広げ、ファング達を迎え入れる。

悪寒、戦慄、狂気
色んな感情が渦巻いた表情に、歡喜の嗤いも込めた笑みを浮かべて。

闇は、密かに笑った。

エイシエントとラーヴァは、焔を頼りにロストタウンの最新部へと

足を踏み入れていた。

途中、瓦礫だらけの通路や巨大な孔が開いた部屋が有った所為で時間を食ってしまったが、漸く二人の居る場所の近くまで辿り着いていた。

同時、微かに感じる狂気の欠片

『この気配からすると、まさか《女帝》が・・・！！？』
『解らないけど、とにかく二人が危ない！！』

嫌な予感がする。肌をチリチリと焼く様な感覚に不快感を覚えるが、今は全速力で走るしかない。

仲間が命の危機に晒されている可能性が有る。

無事で居てくれ、とエイシェントはただただ強く願うしかない。

神も仏も居ない、こんな平等に不平等な世界の運命に。

通路を曲がり、果てしなく長い通路を突き進んでいく。そして、その先の光に飛び込む

其処は夕焼けの色に似た焔が辺りを囲む世界。神に祈る為の聖堂が戦火の炎に焼き尽くされている、そのなんとも滑稽な姿が印象的な風景が広がる。

その中心に居たのは

女王とその従者である悪魔。

『おお？喜べ、犬共。ご主人のお迎えだ』

時間が刹那の内に凍る。踊る焰の中心に佇む、同じ少女。その手に握られている大きな剣の表面には、黒い靄が大量に纏わり付いている。

その靄を見て、何かを察したエイシエントの思考は真っ白な世界に覆われる。

小刻みに震える身体、武器を持つ手がギリギリと柄を強く締め付ける。

足が歩を進めるのを止める、ゼエゼエと荒い呼吸が震え出す。

エイシエントは少女の姿から地面へと視線を移す。其処には、二つの『何か』が転がっている。

ボロボロに成った黒い衣装と、不自然な方向に曲がった手足、彼女の自慢である巨大な手腕は大小様々な切り傷に塗れていた。

『……え、しえ……』

『つぐあ……』

『っ！』

二人の呻きを聞いた瞬間、エイシエントの中で何かがブチリと切れる音がした。

憤怒と悲痛の想いが絢交ぜになる。それは質量を増して螺旋を描き、やがて頭の中にある全ての安全装置を次々と外していく。

ブラックゴールドソーはエイシエントの攻撃回数から一瞬の隙を突き、大剣を降り下ろす。が、その一撃は直ぐに防がれてしまったが、それでも彼女は満足げに笑う。愉快極まりないとばかりに、だ。

互いに武器を離すと、もう一度剣戟を繰り広げる。ブラックゴールドソーはエイシエントの猛攻をまた躲すと、自分の近距離まで近づいて来たエイシエントの腹目掛けて、膝蹴りを叩き込む。

膝に着けられていたレッグアーマーの刃がエイシエントの腹を貫通し、蹂躪する。

『エイシエントオオオオオオ!!!』

ラーヴァが悲鳴を上げたのをボンヤリと聞いていたが、エイシエントは諦めていなかった。

直ぐに《女帝》の足をホールドし、彼女のもう片方の足を払う。そして自分の身体を捻り、思い切り後方へと投げ飛ばす。《女帝》は身体を捻って無事に着地する瞬間、エイシエントは文字通り『血を吐く思い』でラーヴァに叫ぶ。

『今だ、ラーヴァ!!!』

『応!!!』

『させないわよ!!!』

先にデッドマスターが無数の鎖をラーヴァ達目掛けて投げつける。その鎖の一本一本の先端にはダイヤ型の円錐が取付けられており、

その先端は恐ろしく鋭い。当たれば怪我どころの騒ぎではない。

ラーヴァは黒の外套を留めていたボタンを外すと、その中から大量の重火器が顔を出す。

どれもこれも黒光りした重厚そうなサブマシンガンにガトリングガン、ライフル・・・ありと凡ゆる銃が所狭しと並べられていた。

『なあ!!!?』

『殺れ!!!』

エイシエントの言葉を引き金にして、ラーヴァは自身の武器

『Eruption Volcano』の弾丸

を放つ。

轟音とファイアフラッシュの嵐。

銃の群集が那由他の合間に弾丸を銃口から吐き出し、空になった薬莢を排挾器が吐き出していく。

何十、何百、何千もの弾丸が数秒の内に消え、目標に向かって翔いでいく。

デッドマスターが放った鎖は弾丸で細々と撃ち抜かれ、《女帝》が盾代わりにしている大剣も、徐々に軽い凹みが生じ始めている。

『つつ・・・相変わらずの威力だな・・・』

エイシエントは倒れていた二人に覆い被さり、頭スレスレを飛ぶ銃

弾にヒヤヒヤしていた。

ラーヴァの放つ『Eruption Volcano』は、大量且つ巨大な重火器を乱射する、云わば『必殺技』なのである。弾幕を張って仲間の援護や敵の隙を作るのに使われている。

だが威力が破壊的ただけ有り、味方が居ない状態で使わないと敵味方関係なく平等に屠られる。

エイシエントは間合いを見計らい、二人の身体の下に両腕を潜り込ませると、そのまま米袋を抱える要領で持ち上げる。其れを見て、ラーヴァが方向を少しずらし、エイシエント達に道を譲る。

『よっしゃ、退却う

!!!』

エイシエントは弾丸を極力二人に当たらぬように躲し、そのまま聖堂の中へと逃げ込んでいく。
ラーヴァも聖堂の扉の近くまで弾幕を張ると、直ぐにその中に入っ
ていった。

『まさかデッドマスターが蘇るだなんてな・・・』

聖堂の奥深く。蛇の様にクネクネした通路を抜けると、闘技場の様な広いアリーナへと出てきた。

《女帝》の気配が遠くなつたのを感じ、撤退したのだろうかといシエントは考えた。

今いる場所は敵の手中と同じ、まだまだ油断は禁物である。

ラーヴァは怪我を負つた二人の手当を施していた。彼曰く『重症そうに見えて軽傷だつた』との事。

つまりは、《女帝》は二人を殺しもせず、ただ弄んだという訳だ。

彼女の慢心が救いになつた事を、エイシエントは少しだけ彼女に感謝した。

『良かったな、大したコト無くて』

『……くそっ！何にも出来なかつた！！』

『其れで良いんだよ、ファング。何か仕掛けてたら死んでたぞ』

ファングが仰向けに寝転びながら地面を強かに殴る。彼は横腹と右腕の切り傷と脚の骨に輝ひびが入つてた以外は、掠り傷にも満たない。ストレンジスも打撲と軽い切り傷だけで済んだものの、両腕の関節を外されて一時的に『Ogre Arm』を振るう事が出来なくなつていた。

『すまん、大人しく撤退すれば良かったな……』

『否、俺の方こそ……4人で行きやどうになつたけどさ……』

『だがこうして最深部に入れた御陰で、《流星》の力が強く感じる。』

不幸中の幸いとはこの事だな』

『だが悠長に構えても居られんぞ。此処で対策を練らんと・・・』

治療中のストレンジスが上体を起き上がらせ、今後の作戦について口を切った。

そう、怪我人が3人も居る上に、未だ此処は敵の懐の中なのだ。もし新手が現れたり、もう一度《女帝》が戻ってくる様な事があれば全員共倒れになってしまうのがオチである。

『ま、確かにねえ・・・お前の言う通り、ゆっくりしてらんないし、敵も俺達の行動に勘づき始めた・・・』

エイシエントは言いつつ髑髏の指で鼻を掻く
考え事をしている時に出る癖だ
と、ふう、と溜息をついた。

『まあ、此処周辺を探せばどうにかなるかもな・・・今は傷を癒すしかないし』

『新手が来たらどうすんだ？』

『俺とラーヴァでどうにかする。お前等は休め。』

無数の戦火の傷跡が刻まれた闘技場。此処で一時の休息を得られるのは幸運であり、疲れた身体を休めるにはうってつけであった。今は暫し羽を休め、後で《彼女》の痕跡を探せば良い。

4人は今の休息を噛み締める様に、暫く間、言葉を交わさなかった。

Obverse 変化を望んだ者、望まぬ者

「おっはよー！」

「おはよう、マト」

時は移ろい、カナコが転校してきて1ヶ月が過ぎようとしていた。季節はこれから初夏に入ろうとしているが、まだまだ肌寒い季節が続いている。

「ええ、それ本当？」

「嘘じゃないって、ホントに後輩がクラスに来て・・・」

マトはいつもの通りにヨミと他愛ない話をしながら駅へ向かい、学校まで登校する。

一年前はまだお互いギクシャクしていたが、今となれば腹を割って話し合える仲に至っている。

それがただ愛おしく、大切な時間なんだと二人は知っている。

「世は受験シーズン突入間近なのに、アタシ達はこのまま高等部いくのかー」

「俗に言う《エスカレーター式》ってヤツだからね、ウチの学校は」

マト達の学校は中高附属の私立なので、中等部の場合だと殆ど無試験のまま自動的に高等部へ上がれるのだ。マトの言う通り、何の努力も労力も無い状態で高校生活をエンジョイできると、他の受験生にとっては夢の様な話なのである。

「勉強嫌いなマトが珍しいね。あ、もしかして数学に興味がわいたとか!？」

「ば、冗談!全然そんな事ない!!寧ろホントに大嫌い!!この世から消えてしまえばいいんだあんなの!!!」

「ええー、解ればすごい面白いのに。」

大嫌いな数学の話題が出てきて、苦虫を潰した顔をしながら語るマトを見て、ヨミはくすくすとその反応を意地悪く見ていた。数学のテストの順位は尻から数えた方が早い程の点数だと豪語している位、彼女の数学嫌いは酷いようだ。

「ヨミくらいだあって、勉強熱心な人なんてさー」

「マトのクラスには居ないの?私みたいな人」

「・・・『万能の女王様』なら居るけどさ・・・」

ヨミの言葉で何かを思い出したのか、マトはボソリと何事かを呟く。その剰りの漫画に出てくるようなネーミングに、ヨミは自分の耳が正常かどうかを疑った。

「……万能……なに？最近出た漫画？」

「違うよ！鐵くろがねさんの事だよ。」

「え！！？」

「あの人ってスゴイよ？勉強は勿論、体育も美術も音楽も家庭科も！とにかく全教科オールパーフェクト！完璧な人間は居ないって誰かが言ってたけど、ありや嘘だね！居るもんアタシのクラスに！」

才色兼備、文武両道、眉目秀麗。全知全能が神だとするなら、彼女は最も神に近い存在なのだろう。

他の人と引けを取らない、負ける理由さえ見つからない程にパーフェクトな彼女。

その噂はマト達中等部だけでなく高等部にまで及んでいるらしく、つい先週にはカナコのファンクラブが結成されたそうだ。しかも規模は中高部含めて千を超えるとの事。

「凄い人気だね……あ、だから『万能の女王様』？」

「うん。ファンクラブの人が付けたんだけどね」

理由は概ね把握したとはいえ、何というネーミングセンスなんだと声を大にして言いたいが、其処は本人の為にも抑えておこう。彼女が知ったら可哀想な結末しか待ってない気がしてならない。

「マト……鐵さんその事知ってるの？」

「いやあ、多分知らないかな……流石に『アレ』で呼んだら可哀想だし」

「何が可哀想なのかしら」
「ひゃあああ！！！！？」

二人の肩に、綺麗な手がポンと置かれる。あまりにも突拍子のない事だったので、ほぼ同じタイミングでソプラノの悲鳴が二つ宙に飛んでいった。

「あら、そんなに存在薄かったかしら」

「くくくく、鐵さん！？」

「うわああびつくりした！心臓止まったかと思った！びつくりさせないでよもお！！」

「あら、心臓が停止したなんて貴重な体験ね。」

何処かずれているカナコの発言に目を白黒する二人。

というか、一体何時後ろに居たのだろうか。全然気がつかなかったので、さっきまでの話を何処まで聞かれていたのかが気になってしまふ。

「そういえば黒衣さん。貴方悠長にしてて良いの？」

「ふえ？あれ？な、なにか有ったっけ？」

「・・・今日は貴方が日直当番でしょう。昨日先生が『明日は早く来るように』って仰っていたでしょうに。もう忘れたの？」

カナコが呆れたようにマトに説明すると、当の本人は数コンマ秒遅れてその記憶を思い出す。

担任に頼まれ事を任されていたのを、彼女はすっかり忘れていたのだ。今日は朝練も無かったので何時もより少し遅く出た為、時間的に間に合うかどうか。

「うわああ、ごめんヨミ！ワタシ先行くわ！」

「解ったわ。じゃあまた後でね」

「ごめんね、じゃー！」

マトはカバンを持ち直すと、そのまま急いで学校まで走っていった。残されたヨミとカナコは彼女が校門に入っていくまでその姿を目で追っていく。

「やっぱり速いわね、黒衣さん」

「ええ。バスケット部が一番速いって、皆一目置いているもの」

「小鳥遊さん知ってるの？」

「ワタシ、バレーボール部なの。同じ体育館だし、バスケット部の隣で練習してるから」

カナコの質問にヨミは笑顔で答える。そういえば、彼女とはあまり会話する機会が無かったから丁度いいか、と思い、ヨミは彼女との会話を楽しむ事にした。

「鐵さんは何か部活に入るの？」

「いえ私はやらないつもりよ・・・今更入ったって仕方ないし、多分他の人とは馴染めないわ。それに、あまり趣味も特技も無いから」

「ええ、鐵さんって何でもこなせそうな気がするけど・・・」
「それは嘘よ。周りがそう言って持ち上げてるだけ。天才でも何でもない。」

カナコの地雷を踏んでしまったのか、いつもの無表情な顔に悲しみの表情が浮かぶ。

ヨミはハツとしてカナコに何か言ってあげようと思ったが、その言葉が上手く出てこない。

どうしようと悩んでいる真下、カナコは端正な唇から言葉を零していく。

「親が良い学校に入れるように沢山勉強しろって、幼稚園の頃からエリート塾みたいな所に入れられたり、テストで悪い結果が出たらいつも大量のドリルやら解かされたし。だから両親を見返すために必死に勉強したから、こうなっただけ。御陰で今迄友達すら作れなかったし、成績が良いからって虐められた事も有ったわ。それで引越しを繰り返したりして、今に至る訳よ」

カナコの過去を聞いて、ヨミは昔の自分を重ねた。
沢山引越しをした所為で、沢山の友達と別れた過去。ドイツの異文化に馴染めず、日本人である事をからかわれた過去。自分の為に頑張ってくれている両親に当り散らしてしまった過去。

ヨミは何故だか、自分はカナコと似ていると思った。
同情から来ているのも有るが、いつもは淡々と物事を熟す彼女にも、人と同じ悩みが有る事に

一種の憐憫の感情が芽生えていたからでもある。

「鐵さん……そんなに大変だったの……」

「あ……御免なさい、こんな話なんかして。重たいだけよね。忘れて」

「うづん、良いよ。鐵さんの事、良く理解できた気がするの」

ヨミの言葉にカナコは目を瞬かせる。ヨミは呆然とするカナコを見据えると、笑顔でそう言った。

ただ、有りの俣の思いを込めて。

「私も鐵さんと似たような感じで、友達とか親友とか、そんな人が周りにいなかったの。でもね、此処に来てから……うづん、マトに出会ってから、毎日が楽しくなったの。臆病で引っ込み思案だった私に、色んな事を教えてくれたし、何より《勇氣》をくれた。その御陰で今は友達が沢山増えたの。」

どうせまた別れてしまうから、という理由で他の人と距離を置いていたあの頃。いつも一人ぼっちで過ごしたあの頃。誰もヨミには近寄らなかったし、ヨミも誰にも近づかなかった。

でもマトは違った。彼女は自分が引いた線をアツサリと飛び越え、彼女の目の前に現れた。

そして同じ時間を過ごしていく内に、ヨミが引いた線をマトは消して呉れたのだ。

臆病な自分が引いた、心の壁を。

「マトが私を変えてくれたの。だから今の私が有るのはマトの御陰。」

明るく元気いっばいで、それでいてとても眩しくて。

ヨミはいつか自分もそうなりたいと思えた。明るく輝いてみたいと思った。

そして、今その夢は叶ったのだ。

だから

「鐵さんも変わるよ。きっと新しい自分に成れる」

「っ

」

辛くて暗い過去から脱して欲しくて、もう誰もいない場所で泣かないで欲しくて、ヨミはそんな意味も込めた言葉を紡いだ。その思いが届いたのか、カナコは目を見開く。驚いたような、ハツとしたような、そんな表情を浮かべてヨミを見つめていた。

「・・・あ・・・ごめん、説教ぽくなっちゃったね。そんなつもりじゃなかったんだけど・・・」

「い、いえ・・・嬉しかったわ。どうも有難う。それじゃ」

「あ、うん！またお昼！」

苦笑いを浮かべるヨミにカナコは小さく微笑んでそう言うと、自分の教室の中へと入っていった。

歩きながら色んな話を話したが、彼女の過去に触れられて良かった気がした。ヨミはカナコと少し心の距離を縮められたかな、と少し満足気にそう思った。

《変わる》？馬鹿言わないで。絶対に嫌よ。

カナコはカバンを下ろすと、机の中に教科書やノートを入れていく。クラスメイトが「おはよー」と笑顔で挨拶をしてくるのを、カナコは同じ挨拶でいなしていく。

私を理解？冗談、そしたら貴方は私に馴れ馴れしくしてる訳がないじゃない。

時間はHR10分前。それまで何か読もうとカバンの中から本を取り出した。

その本のタイトルは『ハムレット』。

貴方も変わり果ててしまったわね。無惨なままで、ね。

「・・・《ああ、こんな悲しいことが！昔見た眼で、今この有様を見ねばならぬとは！》、か・・・」

シェイクスピアが数々の名台詞を残した悲劇の最高傑作。その中の一文を、自分でも聞き取れるか位の小さな声で読み上げると、カナコは窓の外を見ながら小さく嗤った。

『汝うぬをもう一度、器に容れてやろう。今度はしっかり《封》をしてな』

外国でも使われない

少なくとも人間の言葉ではない

言葉を紡ぐと、何事も無かったように本を読み進める。後に、その時のカナコの表情がとても楽しそうに見えたとクラスメイトは語る。

「え、ヨミが保健室に？」

「うん。五時間目の途中で急に具合悪くなったみたいでさ。」

放課後、退屈な6時間があっという間に過ぎ去り、一緒に帰ろうとマトはヨミのクラスを覗いた。が、当の本人が教室にいない。偶然出くわしたヨミのクラスメイトに何処に行ったかを尋ねると、どうやら体調不良で保健室に行ってしまったらしい。

「そう・・・ありがとう」

今日の朝は元気だったのに、と心の中でマトは呟いた。ヨミが急に具合悪くなった事など今まで見たことがない。それなりに体調管理はしているし、一体全体どうしたのだらうか。

今日は一緒に何処か寄ろうかと思い、昼休みにユウと野崎と鐵を連れて遊ぼうと約束をしたのに。

具合が悪くなったのなら、後日にした方が良さそうだ。

「あれ、黒衣さん？小鳥遊さんは？」

「あ、ノンちゃん・・・」

クラスメイトのノンと鐵がひょっこり教室から出てきた。どうやらマトがヨミと一緒に来るのを待ってたようだが、一人しか居ないのを見てどうしたんだ、と心配していた。

「今、保健室だって。急に具合悪くなったからって、クラスの人が」

「そうなんだ・・・大丈夫かな、小鳥遊さん・・・」
「・・・」

野崎が心配そうに呟く傍ら、カナコはマトを訝しげに覗き込む。マトが視線に気づいて不安になったが、カナコは軽く首を傾げてマトに訪ねた。

「・・・黒衣さん。小鳥遊さんの事が心配？」

「え・・・」

「さっきから顔に『小鳥遊さんが心配』って書いてあるけど」

徐にカナコはマトの頬を人差し指でチョン、と小突く。小突かれた其処から頬全体に掛けて一気に熱を帯びたのは、きつと自分の本音を見透かされたからなのだろう。マトは自分の赤面姿を見られたくなくて、視線を足元に移して俯いた。

「そ、そりゃあ心配だよ！どうして体調崩しちゃったのかなって思うし・・・朝もお昼も普通に元気だったから・・・無理させたのかなとか・・・」

「なら様子を見に行けば良いじゃない。もう早退してたなら諦めて大丈夫そうなら一緒に帰る・・・これなら良いでしょ？」

「・・・う、うん・・・」

カナコの提案に、マトは承諾した。それならきつと納得はいく。具合を見に行けるし、短時間ならそれ程先生には迷惑はかからない筈

だ。早速、三人は保健室に歩を進めた。

「あ、そうだ！ユウにメールを・・・」

制服のポケットから携帯を取り出して、ユウにメールをしようと画面を開く。

すると、今連絡しようとしていたユウ本人からメールが届いており、『体育祭の実行委員で、今日は一緒に帰れない！ごめん！』と謝罪の連絡であった。

「・・・ユウ、今日は体育祭のヤツで行けないって」

「そっか・・・」

「仕方ないわよ。後、2週間後なんでしょう？」

とはいえ、ユウがいないと若干淋しいモノもある。

ここ最近ユウとマトモに話す機会が減っている。クラスが離れてしまったのもあるが、廊下ですれ違っても少し素っ気ない。部活や帰りが一緒だとしても、何か考え事をしているのか、いつもボーっとして何も話さない日が多くなってきた。きつと実行委員やらの仕事で疲れているんだろう、とマトモヨミもそう思っていたので、彼女には何も触れなかったが・・・。

「うん。まあ、体育祭の実行委員は忙しいからね！仕方ないって・・・あ、着いた」

話している内に、目的の保健室に到着したようだ。
マト達の学校には特別棟と呼ばれる、家庭科室に美術室、理科室や技術室など、主に移動授業でしか利用しない教室と、HRや普通授業で使用する教室と別個で別れている。

保健室はその特別棟の1階に位置しているのだが、先程も説明した通り移動教室以外では先生も生徒もあまり利用していないため、殆ど人通りが少ない。なので、今はマト達3人程しか人がいない。

トントン。

ドアをノックする。しかし、中からは声も音もしない。静寂が広がっているだけである。

2、3回叩いてみたのだが、返事の一つも帰ってこない。おかしいな、とマトは訝しげにドアノブに手を掛け、回してみる。

ガチ、ガチャツ

「あれえ？閉まってる・・・？ センセー？」

「もしかして今居ないのかな？」

「でも、そしたらヨミ何処に行ったのかな？」

マトとノンが会話していると、カナコが閃いたとばかりに意見する。

「もしかしたら、すれ違いで教室に戻ってるとかじゃないかしら？」

「あ、そっか！」

「じゃあ、野崎さんは小鳥遊さんの教室に行ってくれる？私は職員室に行つて先生が居るか聞いてくる。」

「あ、うん。解つた。」

「私は？」

「此処で待機。私達の帰りを待つて。もしかしたら小鳥遊さんが来るかもしれないし」

「分かつた！待つてるね」

マトはそう言つて敬礼のポーズを二人に向ける。カナコは職員室へ足を向け、暗くなり始めた廊下を早足で駆けていった。野崎もカバンをマトにあずけると、ヨミの教室の方へと向かつた。

「……」

一人になつてしまった。しかも、夕暮れの学校の中に。

酷い耳鳴りする程の静寂、蛍光灯が点灯していない夕闇の廊下。まさに何かが出てきそうな雰囲気である。段々と暗くなりつつある空を見ていると、独りだという焦燥と恐怖が押し寄せてくる。

「……よ、ヨミィィ……メールしても返つてこないし」

心細い。というか怖い。オバケが出たらどうしようか。言い様のない恐怖がマトの心を侵食する。取り敢えず誰か一緒に居てくれた方が落ち着くのだが、今はそうもいつてられない。仕方なく保健室の

扉にもたれ掛かる形で待っていると……。

カチ。

金属音。

否、この音は聞き慣れた音、扉のロックが解除された音だ。
一瞬にして背筋に寒気が走る。誰もいない筈なのに、鍵が開いた。
マトは全身が鳥肌になっていくのを呆然と感じた。

「……ヨミ？ ヨミなの……？」

もしかして、中で休んでいるのか？ そんな安易な考えが脳裏を過ぎる。

試しに扉の向こうに居るであろう人に話しかけてみる。
だが、シン、と静寂だけが返答変わりに返ってきただけであった。

「……もしかして先生？ ……あの、誰か居ますか……？」

返答が無い時点でどんどん気味が悪くなり、自分の声も尻窄みになつてきた。

まさか寄りかかった時に偶然開いたのか？ 否、扉が勝手に開くなどありえない。

むしろ先程まで施錠されていたのに偶発的に開くのはおかしい。中

から意図的に開けられたに違いない。

悩んでいても仕方ない。マトは意を決してドアノブに手を掛けた。

カチャ……

静かに、ゆっくりと扉が開く。マトはドアを少し開けて隙間を覗き見た。

保健室の中は真っ暗で、外でも様子が見て取れない。寧ろ人の気配など全く感じないのだから益々不思議だ。

「あれ、おかしいな……つつ!!?」

ドンッ

背中に大きな衝撃が走る。マトはその一瞬の出来事に、頭が付いていく事が出来なかった。

ただ、自分の体が扉の向こうに広がる暗闇に墜ちていくのを感じていた。

「・・・黒衣さん・・・あれ？」

野崎はヨミの教室を見てきたが、結局、彼女の姿は見当たらなかった。

クラスメイトの人に尋ねると、帰りの会でも見かけなかったらしいし、ヨミの下駄箱を覗きに行った所、皮靴がまだ有ったので下校はしてはいなかった。その事をマ트에伝えようと元の場所に戻つてくると、肝心のマットが何処にもいない。

「黒衣さん・・・何処に行っちゃったのかな？」

慌ててマットが居そうな場所を覗いていったが、女子トイレにも近くの教室にも居ない。もしかして、もう中に入ってしまったのだろうか。そう思ったノンは目の前にある保健室のドアノブを握って回してみた。

ガチャ、ガチツ

「・・・開いてる訳無いか・・・」

当然の事ながら、扉は閉まっている。

鍵も掛かっているし、彼女が保健室に入った可能性はゼロに等しい。野崎は諦めた様に溜息を付いて、大人しく保健室の前で待つ事にした。

「鐵さんも居ないし、黒衣さんもいないし・・・どうしたのかな・・・」

誰もいない廊下で、一人野崎はポツリと呟く。時間は、もうすぐ5時になるうとしていた・・・。

「はは、全く昔と寸分変わらず愚かな阿呆あほうだな、ブラックロックシユーター。」

カナコはそう上機嫌に言うと、美しく長い髪を掻きあげた。

職員が使用している机にドツカリと座り、大胆不敵に足を組んで笑っている。

確実に怒られても過言ではないと言つものにも関わらず、中にいる教員達はカナコの無礼を黙認し、決定的に無視を決め込んでいる。

・・・否、教員達自体の様子がおかしい。

『無視』というよりも、まるで彼女の話に『聞き入って』いる様だ。さも彼女が紡ぐ言葉が神の御告でも有るかのように、真剣に耳を傾

けている。その証拠に、職員全員が作業の手を止め、彼女を敬意に満ちた眼差しで見つめていた。まるで信仰集団の集まりみたいだ。

そんな奇怪な状況にも関わらず、カナコは独り言を続けていく。

『無垢な赤子程幸せで未恐ろしいモノは無い、その通りだと思わんか？《アレ》がまだ産湯にも浸からぬ赤子で助かったと思う。何せ周りの奴等から命を狙われておるのだしなあ』

普段のカナコなら絶対に浮かべはしない、鈴を転がす様な笑み。そんな一見愛らしい表情に、えも言えぬ戦慄を覚えてしまうのはどうしてなのだろうか？

この表情を浮かべる彼女こそが本来の彼女なのか、それとも冷徹な程に無表情な彼女が本来の彼女なのか。

それはカナコにしか解らない。

『主、吾等は何を致せば宜しいのですか？』

教職員の一人がカナコに訪ねた。だが、一介の生徒であるカナコの事を『主』等と呼んだ時点で彼等の意思が何処かに行ってしまった様な感覚に陥る。

そう、例えるなら、糸で吊られた操り人形マリオネット。

カナコは、そんな操り人形の群れに冷徹に告げた。狂気的な嗤笑を浮かべて。

『黒^{ヨロシロ}衣マトを殺せ。如何様な手段を行使しても構わん。エイシエン
トが事を起こす前に確実に仕留めろ』

chaotic

蒼き星、昏き夜闇に燦然と

深淵^コまでお出で。

悪虐非道の傷痕を、骨の髄まで刻みつけてあげる。

小鳥遊さん教室に居るかな・・・？

遡ること十数分前、野崎がヨミの教室へと駆け足で向かってる時である。

その途中で野崎は不思議な少女とすれ違っていた。

「とういつとうー」

夕闇に靡く白い髪。か弱く儂い印象に見える、白く透明な肌。その一点を美しく飾る桃色の唇。

まるで漫画の世界から飛び出してきたような出で立ちの少女は、おかしな歌を口ずさみながら廊下を歩く。

あの人の制服、高等部の・・・

野崎は一目見て解った。野崎やマトを含めた中等部は皆、色が紺色なのに対し高等部はモスグリーン。スカートの色も同様に違い、高等部の場合だと臙脂色なのである。

「むとうとういつとうー」

一体何の歌なのか、そもそも其れは人間が発する言語で作られた歌なのか、良くは解らないが、彼女をチラチラと様子を伺っていた野崎はコレだけは理解出来た。

あまり関わってはいけない分類に入る人種である、と。

態々髪を白髪はくはつに染めているので理由は明確だ。

高等部でも中等部でも世間一般でも言える事なのだが、大学生以下の学生は髪は染めてはいけない。

最近が目立たない茶髪やらアッシュやら入れる生徒が多いのだが、まさか髪を白に染める学生が居たとは驚きである。せめて金髪にしてきて直ぐ様指導室行きになった生徒は見た事はあるが。

それに、遠目で見て解ったのだが、彼女の目元が少し怪しいのだ。ずつつと寝ていないらしく、銀色の目　此れもまたカラーコンタクトなのだろうが　目の下にはクッキリしたくまが出来ているのだ。彼女の不眠理由等知らないし知る由もない。

・・・早く通ろつと

面倒事に立ち会つのが苦手な野崎は、直ぐ様彼女の横を過ぎ去り、突き当たりの階段へと小走りで向かったが、野崎は色んな意味で急いでいたので、足元に有ったゴミ箱に気が付かなかった。

「うあ、きゃああつ！」

ガンガラガツシャーンと喧しい音を立てて、野崎は昔の漫画のヒロインよろしく大胆且つ派手にコケる。

ゴミ箱に足を取られた上、小さな綿埃と紙屑をモロに頭から被った野崎の制服は見事までにゴミ箱の中身で汚れてしまった。此処までドジっ娘した覚えは無いのだが、と本人も些か吃驚である。

117

「あいたたた・・・」

「ほにえ？大丈夫かね君イ？」

盛大にゴミを撒き散らして空になったゴミ箱を背から退けようとした時、今の今まで避けようとしていた白髪の少女が此方の方を覗き込んでいるではないか。我に帰った野崎は慌てて立ち上がるうとしたが、

ひっくり返したゴミ箱やらコケた時の衝撃で散乱したバッグの中身やらが其処ら中に散らばっているのを見て、彼女は後悔した。とにかくバッグの中身を拾わなくては、と先にノートやら筆入れを拾う

作業に入る。

「……ご、ごめんなさい、大丈夫ですっ」

「『大丈夫』？ そんな言葉をこの状況下で吐くのかい君イ。ご覧よ、酷い有様じゃないか」

「……す、すみません……」

その通りだ、と反論の余地もなく黙り込む野崎。

床は散乱したゴミや野崎の私物で一杯になっており、今は彼女達二人しか居ないものの、これでは通行人の迷惑になりかねない。自業自得だと反省せざるを得なかった。

其れを見て白髪の少女はやれやれと大袈裟な溜息をついた。そして「君は其処に居ろよお」と、言い残すと、近くにあった掃除用具入れの中から箒と塵取りを取り出し、其れ等を野崎の前に無造作に落とすと、彼女は直ぐに踵を返して何処かに行こうとしていた。

「それでキチンと後始末をしとけよお。こういうのに対しては目敏いからね、先生は。」

「あ、有難う御座います……」

「なあに、礼を言われる迄もないよ。なんてったって今はとっても気分が優れているからね。君らが使用している言語で言うなら『ノリノリ』ってトコかな？ あ、これ死語に分類されてるっけ。まあ、いいか。」

「？……は、はあ……」

「まあ何はともあれ用は済んだから消えるとするよ。それじゃあね、中等部3年B組の野崎ミツカさん。」

「つどつ．．．!!?」

頭にクエスチョンマークが浮かぶが、クラスと自分の名前を言われた瞬間、顔から火が出るかと思う程の熱が集中した。どうしてそれを、と叫ぼうとしたが、彼女は何も言わずに手をプラプラと動かして野崎に一方的な別れを告げていた。最初から知っていたのか、それとも教科書に書いてあった名前を見て言っただけなのか。

熱を帯びた頬が恐怖によつて急激に冷め、それと共に血の気も一緒に引いていった。

顔を赤くしたり青くしたりと忙しく顔色をコロコロ変えていたが、やがて一人にされた事に気がつくのと、直ぐに床を簡単に清掃した後、取残しが無い事を確認してヨミのクラスへと走り出した。

．．．や、．．．て．．．マ．．．!!

だ．．．か、．．．け．．．!!

誰かの声が、微かに耳に残響していた。切羽詰った様な、悲痛な悲

鳴の様な。

だが待てよ、この声には覚えが有る。とても聞き慣れた声だが、その主の名前が出てこない。

彼女を知っているのに名前が出てこない。確か大切な人の名前だった気がする。でも思い出せない。思い出せ、思い出すんだ。

マトは微睡みの中で、何かを必死に思い出そうとしていた。

深い眠りの海に意識を流されそうになりながらも、彼女はそれでも誰かの名前を思い出そうとしていた。

まるで遠い遠い昔の記憶を手繰り寄せようとするように。

目を覚まして。

起きて、此处は危ない。早く目覚めて。

今度は知らない声だ。だが、この声は酷く心地いい声だ。とても安心出来る、優しい声。

その声に促されたように眠りの海からマトは浮上していく。

目を開けると、其処には闇が広がっていた。

……あれ。

そういえばココ何処だったけ……

・・・そうだ、確か・・・誰かに押されて、扉の中に

霞み掛かった頭で、先程までの記憶を辿っていく。

確か自分がいる場所は保健室・・・の筈だ。今は周辺が暗闇に覆われ、手元さえも見えないのであまり把握出来てないが、先程までは保健室の前に居たのだから間違いない。

「・・・う、うぐう・・・」

俯せの状態から身体を起こすと、床の上で気絶していたからか、体のあちこちが軋んでいる事が解る。それと特に強打したであろう額と腹がかなり痛む。かなりの力で押されたのだし、あの時は不意打ちと言っても過言ではない。

此処から出たら、その人に絶対に文句を言ってやるんだから！とマトは思った。

とにかく此処から外へ出ようと立ち上がろうとした、その瞬間

ガッシャアアアンツ！！

「ぐあぁっ！！!?」

唐突に脇腹に走る、強い衝撃。細長い、鞭の様な何かで思い切り叩き付けられた感覚だった。その強い衝撃に細身の体型である彼女が耐えられる筈が無く、そのまま横に吹き飛ばされ、ゴロゴロとボールの様に地面を転がった。

「うづつ・・・」

『あら、生きてたの？』

あまりの痛みに呻くマトを他所に、鈴を転がすような可愛らしい声が暗闇に響く。

マトは慌てて周りを見渡すが、やはり視界には黒色の闇以外は見えない。

『こつちこつち、何処見てんのよ？』

彼女の声の位置からして、どうやらマトの目の前らしい。マトは視線を前方に移して、怪我の痛みをどうにかこらえながらも立ち上がった。

『全く、いつまで経っても起きないからてつきり死んだのかと思ってたわよ。』

「・・・貴方、誰？ 一体私に何の用なの？ 何でこんな事すんの？」

『・・・ホント《あの人》の言う通り。何も知らない奴って、本

『当に怖いわね』

怒りと恐怖を抑え、なるべく務めて冷静に質問したが、返ってきたのは意味の解らない言葉と小馬鹿にした様な嘲笑だけだった。もう我慢の限界だと、マトは其処にいるであろう少女に怒鳴る。

「いいから答えろっ!!！」

『ああ、はいはい。分かったから騒がないでよ鬱陶しい。』

「っこの・・・!!！」

『あらあら怒っちゃった?でも御免なさいね』

貴方みたいな子猫ちゃんに威嚇されても、全然怖くないのよ!!！」

少女が声を荒らげた途端、ヒュン、と風を斬る音が耳朵を打つ。あまりに軽快に、尚且つマトが反応しきれぬ程に速い音であった。

そして頬に感じる、冷たい風の吐息

「っ　　っ!!!!?」

動物の持つ生存本能とやらが脳に向かって大きく危険信号を叫んだのか、マトの体は刹那の内に脳から回避命令を出し、自動防御を働かせる。

主の命に反応した従順な体は勢い良く横に傾き、スレスレの所で攻撃を回避した。

次いで、マトが居た床は爆音と共に放たれた鎖によって自身を穿たれ、粉々に破壊されてしまった。もしマトが躲さないでいたら、確実に身体にどでかい風穴が出来ていただろう。そう思った途端、どつと汗が全身から流れ出す。

『あら？憑代のクセに、意外に反応は良い方なのね』
「・・・！！？」

声の主は、本当に驚いたとばかりに感嘆の息を吐いた。何故か褒められたマトは動揺したのだが、声の主の近くからジャラジャラと小刻みに鳴る金属音の方がかなり動揺する。

一体何をするのだろうか、マトは身を固くした。先程の様に痛いシツペをされるのはこりこりだ。

マトは覚悟を決めて全身の筋肉を力ませ、地面を貫くのではないかと思う程に足を踏み鳴らした。そしていつでも回避が出来るように姿勢を低くし、前方に僅かに倒す。

いつもやっているバスケットボールの構え。恐らくこの構えこそがマトの最大の迎撃体制であり、彼女が3年余りで磨いてきた必殺奥義でもある。

だが反対に、今の彼女は武器も持っていない、つまり丸腰の状態。マトは今、武器に成り得そうなモノを所持していない。というより荷物は保健室の扉の前に置きっぱなしなのだから何も無い。故に、彼女は武器を使用した戦闘を諦め、肉弾戦で勝負しようとしているのだ。

『あらあ？人間如きの分際で、《イクリプス》に戦いを挑むなんて．．．愚の骨頂ね。ホント、無知というのは質が悪いわ』
「．．．さつきから聞いてれば、意味わかんない事ばかり言つて．．．！あたしは此処から出て、友達を　　ヨミを探さなきゃなんないんだから！！」

そう、ヨリシロだとか、イクリプスだとか、そんなものはどうでもいい。

マトは此処から出たいだけだし、なによりヨミと一緒に帰りたいたいけなのだ。

またもう一度、彼女がいなくなるかもしれないと思ってしまうから

『．．．．．《ヨミ》？　ふうん、そう．．．．まあ良いわ』

少女は何かを納得した様に言うと、また甲高い金属音を鳴らす。そして舐める様に冷風がまたマトの体に当たる。

来る！

今度は大きく後退して躲し、安全な場所へと逃げ込む。後ろから見えない巨人の手がドン、と床を打ち貫く音がするが、今は何かの下に隠れないといけない。なぜならば此処は保健室。少なからずベッドやら机やらがあるのだから、其れを使って即席の遮蔽物を造ろうというのだ。

確か此処等辺に・・・!!

いつも机がある場所に向かい、闇雲に手探りで机を掴もうとする。しかし、幾ら手を伸ばしても肝心なバリケードが見つかからない。彼女の手は目的の物を掴めぬまま空を切るばかりである。

「・・・!? 嘘、無い、無い・・・!」

『何して遊んでいるのかしら、お嬢さん?』

後ろから少女がマトに声を掛けた。その瞬間、背中に鋭い痛みが走る。だが今度は金属ではなく、足　　つまり蹴りを入れられたのが解った。その威力は強烈で、マトにとって今までに感じたことのない痛みである。

TV番組によく出るムエタイ選手や武道家のキックって、こんなに痛いのかな。

良く皆耐えられるよな

マトは前方に倒れつつも、ぼんやりとそう思っていた。

脳の命令は外から来た痛みで完全にシャットアウトされ、体を上手く操縦出来ない。糸の切れた操り人形よろしくそのまま彼女の体は為す術なく倒れ、摩擦で皮膚の表面がずり剥ける、そんな痛々しい音をたてながら床を滑った。

「ぐうつ・・・!!」

『戦闘中に余所見なんて、随分な御身分ですこと!』

もし彼女がバスケではなく、せめて自身の手足を武器にする空手やボクシング等の武道を学んでいたなら、勝率を少しでも高められたのだろう。

そして何より、見えない敵に背を見せた事が、無謀な敵に挑んでしまった事がそもそもの間違いなのだ。

マトは逃げるべきであった。そして敵に断罪されるべきであった。

戦う術を持たない者は、戦士に殺されてしまうのが道理なのだ。

『さて』

止めと参りましょうか』

斯くて、悪虐非道の刃は落ちる。

……貴方を助けてあげる。

貴方が、あの子を助けたかった様に。

今度は、私が貴方を助けてあげる。

蒼い星が、燦然と煌めき、瞬いた。

大量の鎖を獲物に向けて放出する。これで目の前に居る脆弱な獲物を殺せば、『彼女』のノルマは遂行される。

そう思った矢先、獲物の身体から《蒼い炎》が灯る。

『!!!?』

その光を彼女は覚えている。

此の火は忌々しい程に暖かく、優しく、何よりも尊く見えてしまう。それと同時に、不死鳥の如く死から目覚めた少女の、覚醒の狼煙ともいえるのだろう。彼女は動揺した。恐怖した。絶望した。

やはり再び此の世に現れ出たのか、と。

『……遂に出たわね、ブラックロックシユーター命を穿つ者』

怨恨の唸りと共に、少女は炎を纏いながらも立ち上がる。

獲物の先程までの雰囲気、否、何から何まで変化していた。

白と紺色を基調した制服は黒のロングパーカーへ変貌し、同じくらしい揃えられたツインテールは左右長さが異なっている。

変身した、否、獲物は『乗っ取られた』のだ。

彼女にも言える事だが、今居る怨仇えんきゅうの意思によって、獲物は身体を無理矢理転換させられたのだ。

早めに殺そうとしたのにも関わらず、何たる失態。彼女は自分の爪の甘さに舌打ちした。

だが後悔した所で状況は変わらない。厄介極まりない敵が此処に現れてしまったのは事実である。

澄みきった青の瞳が、真っ直ぐ此方を見つめる。

『
・
・
・
・
・
・
その子を返して、
死を征服した者』
デッドマスター

Chaotic 死闘、再び

私を呼んで。

その唇で、此の世でたった一つの名を呼んで。

今は怖くて、暁の空を疾^はる事が出来ないけれど。

けれど、どうか……私に、この一步を踏み出す勇気を。

無音の闇を仄かに照らす、一つの蒼き焰。

其の光は筆舌に尽くし難い程に美しく輝き、そして優しく全てを包み込む。そして、焰から遠くに居るのに感じる、この酷く優しい熱に思わず涙を零してしまいたくなる。

『……だから嫌いなよ、アンタの焰は』

聖者が放つ、赦しの焰。

それに照らされている悪魔はボソリと悪態を付きつつも、眼前の少女を見据えていた。

少女の特徴としては、病的な迄に白い肌に残る二つの大きな傷痕。それを隠すように黒のロングパーカーを着用している事。そして、華奢な身体に似合わない程の大きさの鐵の銃砲を構えている事の一つが挙げられるだろう。

ゴツイ砲身を持つ銃砲とは不釣合いに美しい少女。これが、デッドマスターを含め、同類達の『宿敵』なのだから困る。

『……憑代を返しなさい、デッドマスター』

静かに、けれど凜としたその声は、静寂を守る闇の世界に響き渡った。

その威風堂々な姿と威圧的なオーラに、デッドマスターは気圧されかける。

以前、彼女とは憑代の奪い合いで死闘を繰り広げたのだが、以前の時のよりも強さや殺気はかなり増している様に感じた。

以前よりも力を蓄えたのか、或いは以前の戦いは本気では無かったのか……

デッドマスターは前者の考えを否定した。そんなのはありえない。何故ならば、彼女の憑代は極々普通の、しかも戦闘訓練もされていないか弱き少女なのだ。

剣や銃等の武器を大凡身に付けた事も無い、非力な存在。そう言っ
てしまうと、自分の事も棚に上げている様に聞こえてしまうが、そ
れもまた事実。

つまりブラックロックシューターは本気で自分とは戦っていないかっ
た、という事である。

ただ、彼女は自分と殺し合いをしに来たのでは無く、純粹に黒衣マ
トという少女の、《また親友と笑い合いたい》、そんなちっぽけな
願いを叶えた。只それだけの事だったのだ。

その事がとても腹立たしく、そして何よりも戦士として屈辱的だっ
た。

前に繰り広げた死闘。あんな血肉が踊り沸き立つ様な戦いは、彼女
にとっては只の茶番だったのでいいのか。

『……フン、えっらそうに言ってくれちゃって。』

デッドマスターが拗ねたように文句を言うと、ブラックロックシュー
ターが出し抜けに『Rock cannon』の砲口を金属
音と共に彼女に向ける。

一瞬、デッドマスターに緊張が走ったが、しかしその後は何も起こ
らなかつた。それどころか、ブラックロックシューターは攻撃もせ
ぬまま『Rock cannon』を地に降ろしたではないか。
デッドマスターがどうしたのかと不思議そうに一瞥すると、ブラッ
クロックシューターは静かに告げた。

『今のは警告、次はない。』
『・・・成程ね』

デッドマスターはやれやれと肩を竦める。つまり、彼女の意に沿わない回答をすれば、次は間違いなく身体が蜂の巣と化す、という事だ。しかも向けられているのは毎秒20発の岩の弾丸が放たれる砲身だ、次の瞬間にデッドマスターの体は木端微塵になって居るだろう。

だが、悪魔はそんな脅しには屈しない。
何時もの様に不敵な笑みを浮かべ、少女に対しておどけて見せた。

『・・・残念だけど、答えは《NO》よ。そう素直に返すと思ってんの？』
『・・・そう・・・本当に残念・・・』

本当に残念そうにブラックロックシューターは呟く。説得が無意味だったというのが解ってしまったからなのか、それともデッドマスターを殺めてしまうからかは解らないが、彼女の無表情な顔にほんの少しだけ苦しそうな感情が有ったのは確かだ。

ブラックロックシューターが一步、デッドマスターに近づく。
その一步をただ踏み出しただけでも、直ぐに緊張が伝染病のように広がっていった。

デッドマスターは近づいてくる怨敵に微笑む。

怨敵の真剣な眼差しに灯る小さな憎しみの光が灯っているのに気が付いたからだ。

彼女の持つ蒼い焰は嫌いだが、デッドマスターは彼女にも宿るその醜い光が大好きなのだ。人間にも《イクリプス》にも平等且つ公平に宿る、争いや戦いの火種の焰。屍の華が咲乱れる世界を照らす、その灯りを見るのが堪らなく心地いい。

戦うのは好き、争うのも好き。死を蔓延させるのは戦争だけ。戦争は何もかもを殺せて壊せる。其処に私が在るのは至上の喜び。私は《死神》。平等に公平に裁きを下せる存在。

再び合間見えた事を自身の『女帝』に感謝しつつ、彼女は心の内で小さく呟いた。

さあ、楽しい楽しい戦争ゲームの始まりだ。

やがて一歩一歩、デッドマスターに近づくにつれて歩くスピードが早くなっていく。

ブラックロックシューターは大きく踏み出したと同時に、距離を一気に詰めて肉薄する。

ワントンポ遅れたデッドマスターは先に背から無数の鎖を展開し、鉄の花の蕾を造り出して防御を固めた。次いでブラックロックシューターのキャノンがハンマーのように鎖の壁を乱暴に叩く。

しかし、壁は微動だにしない上、傷一つ付いていない。どうやら強度は前回の時よりも上がっているらしい。

ならば追撃するのが妥当だと云うものだ。
ブラックロックシューターは砲口を鎖の蕾に向け、蒼い焰と共に岩石を撃ち出そうと引き金に指を引くと同時、巨大な砲口から黒い岩石が発射され

カチャン！

・・・ない。

ブラックロックシューターは、ここぞという時に空回りした砲身を見る。

引き金にも違和感を感じなかった。ならば動作不良では無い筈。

そうでないなら、一体・・・!!？

ブラックロックシューターが困惑した、その一瞬を狙いすましていたかのように、鎖の蕾が開く。
開花した分厚い花弁は即座に細かい鎖に別れ、無数の触手となってブラックロックシューターに襲いかかった。

まず一本の鎖がブラックロックシューターの右太腿に絡みつき、次に左腕、胴体、右腕、両足・・・どんどん彼女の体へと余す事なく巻き付いていく。

デッドマスターはしてやったりと北叟笑ほくそむと、ブラックロックシューターに巻きついている鎖の一本を掴み、遠くに向けて彼女を乱雑に宙へと放る。その時、鎖は有りと凡ゆる方向に蠢いてブラックロックシューターの肢体をきつく縛り付けた。

多变的に変化する痛み思わず呻き声が出たが、次に襲いかかった背中からの着地際の衝撃に短い悲鳴が上がった。受身も取れずに落ちたので、痛みは鎖より断然勝っているだろう。

『全く相変わらず強引な奴ね・・・言い忘れてたけど、そんな事しても無駄よ』

『・・・？ どういう事・・・？』

叩き付けられて俯せになった状態のまま、ブラックロックシューターが訝しげにデッドマスターを訝しげに見やる。其れを見て思っていた以上の反応だ、とデッドマスターもニンマリと余裕の笑みを浮かべた。

『この世界は表世界に強制的に繋げた《イクリプス駒領域》ピース・テリトリーなの。

本来、裏世界に住む私達イクリプスの世界と、表世界に住む《憑代》の世界は、例外が無い限り、お互いに干渉出来ない。コインの表裏みたいだね・・・其れ等の間を無理矢理結んで出来た、表でも裏でも無い世界。つまり此処は境界線の無い、とても曖昧で不安定な世界なのよ。』

『・・・つまり？』

『あら、まだ解んないの？ 《イクリプス私達》は《ピース・テリトリー駒領域》の中でしか、十二分な力を発揮出来ないの、忘れたの？』

『・・・！』

ブラックロックシューターは漸く理解出来たとばかりに、顔を青くさせた。

動物が巣穴を作るのと同等、《イクリプス》は自分の縄張りを護るために《巢》を作るのだ。

とはいえ、小さな獣が無い頭で考え尽くした様な矮小且つ陳腐なモノではなく、ヒース・テリトリ 広大で豪華な《巢》。

それが駒領域と呼ばれる空間なのである。例として挙げるなら、デッドマスターが拠点にしていたロストタウンの聖堂がそうだ。

『つまりこんな曖昧の世界ではアンタの焰は只の灯りだし、アタシも満足にアンタを傷つける事が出来ないってワケ。それに・・・こうしている間にも《憑代》の《侵食》は始まってるとして事よ?』

にこやかにデッドマスターは残酷な真実を告げる。その言葉は咎人を断罪するギロチンの刃の様にブラックロックシューターの頭から降り落ち、彼女の真面な思考を切り取ってしまった。

侵食。

この言葉が如何に恐ろしいモノであるのかをブラックロックシューターは知っている。

侵食というのはつまり、『精神汚染』

思考の欠落。人間

が本来持っている正常な判断や思考が徐々に喪われ、最終的にはただの人形に成り果ててしまう事を指す。

今回を含め、ブラックロックシューターは二回しか《憑代》を使っていないとはいえ、彼女・・・この不安定な空間に居る所為でマトに被害が出ているのは明白だ。早くしなければ手遅れになる可能性が高くなる。

此処を抜け出すのは容易じゃない。出口も完璧に閉じられてる。

そう、今居る空間は密閉された、所謂『密室空間』なのだ。出口も入口も封鎖された世界。幾らブラックロックシューターでも、自慢の焔を封じられた状態でだと脱出は困難。

ならば一体どうするか。
ブラックロックシューターは意を決すと、身体を起こして立ち上がった。

『あら、漸く殺る気になったのかしら？』
『ええ……どうやら、迷ってる時間さえ無いようだから。』

ブラックロックシューターは精神を集中させ、『Rock c
annon』を空間に仕舞い込んだ。そして、新たに空間から愛刀『Black Blade』を出現させる。どうやら焔は使えなくても、武器の転換は可能らしい。

『私は貴方を倒して、貴方の憑代と一緒に此処を出る。』
『……あーら、随分と甘い考えをお持ちのようで』

デッドマスターは心底呆れたと言わんばかりに肩を竦め、大袈裟に

溜息をついた。

それでもブラックロックシューターの頑固とした意志の強さは変わらない。愛刀を片手にデッドマスターを睨むばかりである。

『……親切心で言っというてあげる。例えアタシを負かして脱出したとしても、其処から先、アンタ達に幸せな未来はもう来ないと思っ頂戴？』

『……構わない。私が全てを護る。』

この憑代と、この憑代の大切な人達を護る。

例え、私がずっと茨の道を歩き続ける事になつたとしても……！！

『いい度胸ね。流石私の宿敵……惚れ惚れしちゃうわあ』

『御託はもう良いでしょう』

さあ、始めましょ

うか』

ブラックロックシューターは凜とした声で告げると、其れが合図だったように互いが臨戦態勢に入る。

何方も冷静に相手を睨みつけ、出方を伺っていた。ジリ、ジリ、と足音が地面をなぞり、互いの呼吸が聞こえるくらいの沈黙が世界を支配している。

そして

音も無く、命懸けの剣戟が幕を開けた。

Chaotic 一難去って、また一難？

『ほらほらどつしたのよ！！さっきの覇気が無くなっちゃってるじゃない！！！！』

『・・・・・・・・つく・・・・・・・・！！』

ギイン、と鋭くも鈍く響く金属音が闇に訝する。

変則的に宙を舞い踊る鎖の群集と、黒い刀身を持つ一振りの刀が火花を散らしてぶつかり合う。

幾度もなく襲いかかる鉄の蛇に、ブラックロックシューターは刀で軌道を反らすか、切り刻む以外には成す術がない。

『蒼い炎さえ無ければ、アンタなんか怖くも何ともないのよ！！この《はぐれ者》が！！！！』

鉄の蛇を背から射出するデッドマスターは、鎖の一筋を手でたぐり寄せて掴みとると、鞭の様にヒュンと振り翳し、態とブラックロックシューターに当てずに、その横に向かって鞭を地に叩きつけた。瞬間、バシイイン！！と豪快な轟音を立てて一直線に地面は割れ、瓦礫と砂埃を飛散させて崩壊した。

『なっ・・・・・・・・』

ブラックロックシューターは鎖の鞭のあまりの破壊力に目を疑う。同時、コレをまともに喰らえば一溜りもない事を本能が察知し、全体を強ばらせる。

本来なら大砲で一発撃てば問題無いだろうが、蒼い炎が使えない上に、標的まては一本一本が繊細かつ小さい鎖。塊で来るならまだしも、単発でだとの絞るには難し過ぎる。

『さああて、もっともっと楽しみたい所だけど時間も押してきちゃつてるわねえ・・・』

『時間・・・!?!?』

ブラックロックシューターが不思議そうに呟いたのを見て、デッドマスターは顔を綻ばせた。

暗く、人を見下した様な 正に悪魔の笑みを。

『さつき言ったでしょ？此処は無理矢理表と裏を結びつけた不安定な世界だつて。』

『・・・成程、少しの時間でしか繋ぎ止める事が出来ないって事ね・・・』

『御名答 それじゃネタバラシした事だし そろそろ死んでくれないかしら?』

心底楽しそうにデッドマスターは微笑むと、振り下ろした鎖を一旦

宙に浮かせると、今度はブラックロックシューターに向けて力一杯叩きつける。

其れを瞬時に感知したブラックロックシューターは、素早く横へと跳んで回避する。

誰も居なくなつた床を、鎖が舐めとるかの如く地を幹竹割りに裂いてゆく。

そしてガツシャアアアン！という轟音と砂埃を豪快に撒き散らしながら、鎖が地面にめり込んだ。

ホツとするのも束の間、デッドマスターは次の鎖を手繰ると、また同じように鎖を地面に叩きつけていく。彼女の背には何千何万もの鎖の束が有るのだ。油断していたら確実に鞭の餌食になるだろう。ブラックロックシューターは持っていた武器を盗み見た。

刀でアレ等を全て切り裂けるだろうか？

答えは否、不可能だ。

先程もそうだったのだが、刀身に鎖が絡まって上手く斬り裂く事が出来ないのだ。それに刀というのは対人用且つ近距離用の武器に過ぎない。遠距離用の飛び道具の前では只の鉄の板に等しい。この刀は鋼鉄を意図も容易く一刀両断する事ができるが、攻撃を躲したり斬ったりしている内に刃零れしている。こんな事は滅多に無いが、これもこの世界の影響なのだろうか。

ブラックロックシューターは刀で応戦するのを諦めたのか、床に武器を投げ棄てたではないか。そして代わりにボクサーの様に拳を前方へ突き出すと、デッドマスターに向かって肉薄する。

『あら、負ける気になつたのかしら！！？』

勿論、ブラックロックシューターはそう思っている訳もなく。勝算は有るものの、問題は彼女に気取られてしまわないかである。

襲いかかる鎖を躲し、時には足場にしながら徐々にデッドマスターとの距離を縮めていく。

かなりの距離を詰められた事で彼女も余裕が無くなってきている様だ。焦っているのが丸解りである。

先程の鎖の攻撃で解ったのは、アレは中遠距離用の攻撃だという事。幾ら攻撃力が桁外れだとしても、所詮は遠くに居る敵用の武器。押して駄目なら引いてみる、遠くにいるなら近づいてみればいい訳である。

『・・・ちい、来るなコノ』

『これで、終わり!!--』

ブラックロックシューターは言うなり拳をデッドマスターに向けて突き出す。

デッドマスターは直撃するのを覚悟して、反射的に目を瞑った。が拳はデッドマスターの顔面に直撃することもなく、彼女の頬すれすれを掠っただけだった。

そして、突き出した拳ごとブラックロックシューターはデッドマスターの横を通り過ぎると、鎖の一本を手で鷲掴みにする。

『つな・・・!!--』

『空間がもう持たないわね・・・それじゃ、私は御暇させて頂くとするわ』

デッドマスターは鋭い爪で先程傷だらけにした鎖の輪を一気に切裂き、手を先に自由にした。ブラックロックシューターが慌てて彼女を捕まえようと手を伸ばしたが、其れをスルリと躲して、逃走するのに十分な距離を置いた。

『待ちなさい!』

『悪い事言わないから、アンタも逃げた方が良いわよー?それにさつきも言ったでしょ?アンタの憑代もアタシの憑代も消耗しちゃってるのよ。無くしたくないならさっさと撤退するのをお薦めするわあ』

それじゃ、またね。

デッドマスターは踵を返すと、そのまま闇に溶け込み、消えていった。

ブラックロックシューターは暫く彼女が消えた方向を見つめていたが、空間の崩壊が激しくなったのを確認すると、自身も暗闇へと姿を消した。

「う……あ……?」

目を開くと、視界は濃紺の闇で覆われていた。

まだボンヤリする頭をフル回転させ、先程の出来事をフラッシュバックしてみる。

ヨミの突然の体調不良、保健室に広がる謎の空間、そして……其処で、自分はまだ変な空間の中にいるのかと、軋む身体を無理矢理跳ね起こした。

しかし、よく見れば其処は見慣れた学校の廊下であった。

入る前と今の違う点を上げれば、時間が夕方から夜になった位の差異であるうか。

「戻って、きたの……?」

座り込んだまま、辺りをキョロキョロ確認して見る。やはり元の場所に戻ってきた様だ。自分の隣に保健室のドアが有る。そして、自分が置いていった通学用のバッグもポツンと残っている。だが……

「ヨミは?ノンちゃんも……カナコも居ない」

そう、さっきまでヨミを探しに行ってくれた友人達の姿は何処にも見当たらず、今はマトを除いて一人も居ない。シンとした静寂が、月明かりに照らされた夜闇の中に降り注いでいるだけである。

マトは徐に立ち上がると、保健室のドアノブを動かした。ガチャガチャと耳障りな金属音を立てるが、それでもロックが掛かっていた。

「夢……?」

先程のあの出来事は、全て夢だったのだろうか。
謎の声が語る、『イクリプス』も、『憑代』も、あの少女さえも。

だが……

身体に受けた痛みが、手足の先に残る小さな痣が、頭で未だに何かの危険信号を放つ本能が、マトに教えてくれる。

まだ、何も終わってはいないのだと。

O b v e r s e

狂乱の宴（前書き）

・アテンション！

今回は微妙なキャラ崩壊要素＋グロ要素が有ります
苦手な方はブラウザバック等して対処して下さい！

万が一気分が悪くなられても、此方は一切の責任は負いかねません
のでご了承下さい。

暗い廊下をひた走る。

闇が太陽を飲み込み、星と月を共に吐き出した世界の中を、ただただひたすら。

「はっ・・・はっ・・・」

居ない、居ない、誰も居ない。

マトは酷く怯えていた。

この時間帯なら居る筈の見回りの先生や警備員に会わないどころか見掛けもしないのだ。

いつも授業で使っている特別棟や体育館、一年から三年迄全ての教室を回って見たものの、何処も明かりも点いて無いし、寧ろどこもかしこも真っ暗だ。

「じ、こんなので・・・！」

最後の教室を周り終え、彼女は走る事を止めた。

マトは携帯を開いて、親に連絡しようとするが、開いた携帯のディスプレイには砂嵐が流れていた。

ザアア・・・、と静かに流れるソレを見た瞬間、マトはヒクリと喉を引きつらせる。

不気味な怪奇現象を此の手で終わらせようと躍起になるが、文字盤を闇雲に押ししても砂嵐が流れる液晶画面に此れといった変化は見られなかった。

何をしてもし直らない砂嵐に発狂しかけたが、年季が古い携帯が起す故障だと　そんな現象は今まで聞いた事も見た事も無いが

自分に言い聞かせ、鞆の中に携帯を強引にしまいこむ。

「・・・つか、帰ろう・・・うん、もう遅いし、帰る・・・」

恐怖で震える手を握りしめ、マトは暗示の様に自分に言い聞かせる。此処にいても仕方ない、と。

ヨミもきつと先に帰ったんだろう。具合が悪かったのなら後日会えば良い。

カナコやノンも、明日来たら早々、振り回してごめんと謝っておかなくては。

頭の中で呟かれる都合の良い言い訳が、彼女の精神を徐々に安定さ

せていく。

「帰ら、なきや・・・」

「おい其処の！！」

「うわあああああ！！！！」

突然の怒号に、悲鳴を上げると同時、マトの身体がプツンと糸の切れた人形みたいに崩れ落ちた。

幾らなんでもタイミングが良すぎると、内心で文句を言った。お陰で心臓が尋常ではない位に早鐘を打っている。

マトの悲鳴が剩りにも大きかったらしく、声を掛けた人物も

とは言え元凶なのだが　かなり驚いたらしい。

「うおお吃驚した・・・って、おま、お前黒衣か！？こんな時間に何してる！？」

未だに跳ね飛ぶ心臓を押さえ、後ろで自分の名を呼ぶ声の方向へ頭だけ向ける。

「せ、センセ・・・？」

其処に居たのは、マトのクラスを受持つ担任の先生だった。ジャージをだらしなく着こなし、片手には何か分厚くて大きい書類を抱え

ており、何処かで会議をしていたのかと思わせる。

「やっぱり黒衣かぁ、驚かせるなよな。てつきり先生、お前を不審者かと思つて・・・」

「先生エー!!」

暗闇に射した光の先に逃げ込む様に、マトは担任に抱き付いた。

普段こんな事はしない質では有るが、先程はとも怖い思いをしたのだ。不安定な精神を安定させようと、本能的に直感が働いたのだ。

「つと、コラコラどうしたんだ。先生に抱き付くな、他の人が誤解するだろう!」

担任の性別は一応女では有るし、別段気にする事は無いだろう。そんな事より、マトは今までの経緯を話し、自分の状況を納得してもらおうと必死だった。

「めつちやくちや怖かった!保健室に行ったら真っ暗で、変な奴が襲いかかって、それで」

「ちょ、ちょっと待て黒衣!何言ってるかさっぱりだぞ!?!一回落ち着け」

先生に促され、マトは漸く落ち着いて内容を事細かく話せる様になった。

友達が体調不良になった事、心配になって他の子と一緒に保健室に行った事。

流石に『彼女』 ブラックロックシューター については言えなかったので、其処の部分は省略して、後は洗いざらい話した。

「信じて先生、ホントに不審者に襲われたんだって！」

「ああ、否・・・勿論お前の話は信じるさ。けどなア・・・」

そこで一旦言葉を切ると、担任は重そうな書類を抱え直す。随分な厚さのフォルダである。暗闇であまり見えないが、図書室の隅っこで埃を被っている六法全書程の厚さだと推測出来る。

随分重そうなので、親切心で持ってあげようと思い、マットは担任に訪ねた。

「・・・先生ソレ持とうか？」

「へ？これか？無理無理、相当重いぞ？」

「大丈夫だよ、コレ位！」

「・・・仕方ない、なら持って貰おっかな」

頑なに持とうとするマットを見て、担任は「黒衣は優しいなー」とニツカリと微笑みを投げ掛けると、そのままマットにその荷物を渡そうと腕を伸ばした。

その瞬間、月光が一段と強く射し込んできた。太陽のように暗闇を照らす柔らかな光が、マトと担任が居る廊下を照らし出す。

「っ ひ、！！！！？」

担任の手に収まっていた荷物が月明かりに照らされ、その正体が姿を見せた刹那、マトは持とうと伸ばした手を引っ込める。

黒く短めの毛、だらしなく垂れた長い舌、何処を向いているのか解らない目玉。

蒼白した皮膚をデコレーションする様に粘液状の赤い液体と透明な体液が頬や額に汚ならしくまぶされている。

そのぐちゃぐちゃな顔面を見せ付ける様に、頭为天辺を驚掴みになっている担任の手は、乾いた茶色の何かがべったりと付着していた。

「いやあ、意外と重いんだよな、人間の頭部コレってさア」

「あ、え……え？」

「どつした黒衣、さっさと持ってくれよ？」

「あ、や……」

担任が然も普通であるかのようにグイグイと押し付ける生首
人形の中でも無く、見た感じからして本物のようだが、生気を
失った目で此方を見ている。

其れはマトの正常な判断や思考を刈り取っていくには十分なインパ
クトで。

手足は理性の命令に反して、勝手に筋肉を強張らせながら震え、歯
はカチカチと奇妙なタップダンスを踊り始める。

「何だ、持てないのか？持つと言っておきながら非道いじゃないか。」

「イヤ・・・、イヤだソレ、本物・・・!？」

「ああ。それがどうした」

マトの恐怖はジェットコースターのように加速し、更なる高みへと昇
らされいった。

手荷物が本物の死体である事を軽々しく肯定し、其れがどうしたん
だと平然と言う担任の頬には、僅かながらの乾いた血液が化粧の様
に付着していた。

まるで、彼女が殺して獲って来た事を物語っているかのように。

「嘘、嘘だ・・・だって、どうして」

マトは為す術なく担任を見詰めながら首を振る。

違う、こんなのは現実じゃない、と、ただただ起きている現実を否定する。

だが、果たして其の否定は今の状況下で、何の役に立つのだろうか。

マトは震える手を、担任の手に重ねようとした。

どうしてそうしようとしたのかは自分でさえ解らない。ただ、マトは否定して欲しかったのかもしれない。

全ては嘘なんだ、と。

だが、担任はマトの手が近づくなり、その手を鬱陶しそうに払い除ける。

パン、と乾いた音が一つ、世界に小さく響いた。

「っ……!」

「……誤解を生む』って、さっきも言わなかったか？」

その時の担任の目が、自分の事をまるで『虫』を見る目をしていたのに、マトは漸く気付いた。

鬱陶しく自分の周りを飛び回る下賤な生き物を見る目。

そんな刺し貫く痛烈な視線が、ただただ許しの嘆願を煽るばかりだ。

「……誤解？」

「ああ。先生は別に、見回りに来た訳じゃないんだよ」

担任が意味深な発言をしたと同時に、マトの頬にヒタリ、と半ば粘着質な音と冷たい感触が広がる。

いつの間にかマトの傍らに生首を近付けていたらしく、先程の感覚は生首が生前ありつたけの量を垂れ流したであろう涙と涎が混じった体液が付着したのだと気付いたのは、遅れて5秒後の事だった。

「ひいっ　　！！」

「お前を、生首と同じにしろって頼まれたんだよ」

『女帝』様　御自らの『御命令』だからな。

担任はネットリと、何かを潰して混ぜた様な穢い嗤笑を浮かべる。其の笑みは確実に全うな人間が浮かべる表情ではない、人殺しが浮かべる狂気的な表情だった。

「あ、あ　あっ……いやああああアああ

！！！！」

狂気が蔓延した刃の様な言葉に、幼子の柔らかな精神が耐え切れる筈がない。堪えられる訳がない。

今の今まで抑えていた恐怖が封を破って一気に爆発し、遂にマトは絶叫した。

其れはもう止めてと許しを乞う様な、目の前のモノ全てを消し去ってくれと懇願する様な叫びだった。

だが不運にも、天は彼女を見捨てた。

担任はネットリとした笑みを貼り付けたまま、憐れな少女を蹂躪せんと飛び掛かる。

救いを求めた切実な祈りは、紫煙の如く蒼空に虚しく解けて消え、代わりに捕食者の大きな顎あぎとが中に入れとマトを誘う。

小さな兎はただ捕食者の分厚い舌の上に、其の身を預けるだけなのか。

「厭アああアあああああ!!!」

だが果敢にも 兎は逃げた。肩を掴もうとする担任を突飛ばし、自分の安全が確保出来る場所まで死に物狂いで逃げていく。

その後ろで担任はガチン、と歯と歯を噛み鳴らし、獲物を逃したとばかりに苦虫を潰した表情を浮かべる。

兎は後ろを振り向く事は無かった。捕食者は取り逃がした獲物の名を呼べど、その速い脚で必死に地を駆けた。

直ぐ様逃した事を後悔したが、ふとある考えが担任の頭に転がり落ちた。

「ああそうか、『追い駆けっこ』だな？『追い駆けっこ』しようってんだな黒衣？そうかそうか。ソレって弱ったトコを喰コロシって下さいって事だよな？了解、解ったよ……」

彼女の頭から弾き出されたのは曲解も良い所の都合の良い解釈であった。

ぶつくさと呟いた担任は、用済みになった　殺した直後から用済みだったが　生首を廊下の隅に放り投げる。

ガツ、ゴトン、と骨が当たる痛ましい音が廊下に響く。だが、文句や愚痴を言う為の口なぞ死人には無い。

「良いぜえ……お前のお望み通りに弱り続けるまで追い掛け回して、喰コロシってやるよ。その代わり　」

担任の言葉が引き金と為したのか、廊下からワラワラと　　まるで砂糖に群がる蟻の様に　　他の教師達や職員が集まっていく。
宛らホラー映画に出てくるゾンビの様に重たく、且つ操り人形の如くきこちない足取りで集まる姿は、とてもおぞましく感じる。

驚いた事に、彼等の手には木製バットや竹刀やら、部活動で使用する　　下手をすれば人を傷付ける道具を握り締めているでは無いか。

「　　『質より量』が『吾達』の攻め方だ。多勢に無勢ってことで、宜しくな『黒衣マト』」

担任、否、其の場に居る職員全員が唇を三日月形に歪めてケタケタと嗤い出す。

耳を塞ぎたくなる程の嗤笑の大合唱が静かな夜闇に鳴り渡る。誰がこんな壊れきった交響曲を聴きたいと願うだろうか。

さあ羊を囲もう。柵を付けたから、きつともう逃げられない。

狼達はせせら笑う。
楽しい楽しい追走チェイスのお時間。
羊は何処まで持つのかな？

夜闇にたゆたう月は、ただそれを傍観するだけであった。

絶叫、咆哮、怒号、後々斬撃打撃の雨霰。

筋肉質な体型をした教師が西瓜割りよろしくバッドで地面や障害物を叩き割り、ヒョロヒョロな細身の教師が腰に着けたバツクルから大量のドライバーやハンマーが弾丸の如く投擲され、マトの頭すれすれを掠めて落ちる。

物騒な騒音のオンパレード。練り歩くは狂気に駆られた者共と、ソイツ等から命からがら逃れる憐れな少女。

狂気の祭りが過ぎた後には、ただ死屍累々の残骸が残るのみ。

廊下に有った掃除用ロッカーやゴミ箱は投げられたパイプ椅子やら分厚いファイルやらで大きく凹み、窓硝子は金属バッドや竹刀で尽く割られていった。

「はあ、ひ、ひっ、は、あ、あ……っ!!」

マトは鼻水や涙で顔をグシャグシャにしている事すら構わず、必死に走り続けていた。

後ろで自分の名を呼ぶ先生達　　否、『アレ』はマトが知っている教師ではない。残虐な思考を持った人殺し集団だ　　の魔手から逃げ切る様に。

ああ、どうしよう。このままじゃ殺される・・・誰か助けて誰か誰か助けて助けて助けてお母さん！！！！

恐怖と混乱で逼迫した脳内回線は、混乱した精神を安定させようと母親の残像を一瞬だけ映す。
走馬灯とも呼べる記憶の再生、其れでも気休めにしか為らないが、今の彼女の精神状態には良い気付けになる。

長い廊下を突き抜け、下駄箱までの通路をひた走る。

先程から走り続けた所為なのか、彼女の脚はとうとう限界を迎える所まで追い詰められていた。
筋肉は悲鳴を上げ、肺はもっと酸素をと泣き叫ぶ。

だが、そんな悠長な事はしてられない。今はこの学校から脱出しなければいけないのだ。
疲弊して纏れる脚を気合いで振り上げ、少しでも速く前進したいとマトは頑張って走る。

そんな彼女を、天はチャンスを与えた。

漸く慣れ親しんだ玄関口までやって来たのだ。

やった、と思わず歓喜の眩きが漏れる。後は此処から脱け出して、家に帰れば安心だ。

マトが安堵した表情で下駄箱まで走っていくと

身体に重い衝撃が走り、次いで視界がぐらりと傾く。何が起きたのか解らぬまま、豪快な音を立てて左半身に強烈な痛みが走る。

「がっ……あゝ、!？」

暮を潰した様な醜く短い悲鳴が喉奥から微かに漏れる。

何が有ったと思った刹那、マトの身体は再び強い衝撃に包まれ自由を失う。脳が沢山入ってきた痛みの情報を処理出来なくなりショートしてしまったからだ。

『ククク……脆弱脆弱、人間の精神なぞ屈強に非ず。薄紙にも劣る脆弱さよ』

ケタケタと低い声は何処からともなく世界に訝した。
其の身の毛も弥立つ恐ろしい声に、マトは為す術も無く震え上がった。

遅れてドカドカと足音の群衆が鼓膜を震わした。教師達が追い付いたのだろうか。

なら、

マトはある事に気付くと、血の気が一気に引くのと同時、身体中の汗腺から冷や汗がタラリと流れるのを感じた。

『コレ』は一体、何……!?

油断していた所を背後から襲い、床に叩き臥せたのは定かだ。だが残る疑問点は2つ。

1つは一体『何時』、『マトの背後に回り込んだ』のか、だ。

玄関口の近辺は姿を隠せる下駄箱やらの遮蔽物は一応有るので、其処から一気に距離を詰めれば可能では有るだろう。

だが、何度も言うようだが、マトが通ったのは『一方通行』である『廊下』であり、幾ら疲弊したとはいえ、彼女は細心の注意を払っ

て一回『前後左右をちゃんと確認』していた。勿論、見た限りは『何も無かった』が。

仮に彼女が見落としたとしても、普通なら走る際に『足音』がする筈だし、視界の端に『人影』が見える筈なのだ。

なのに『何も感知出来なかった』。其れはとてもおかしい事である。

そして此処で2つ目の疑問点。

マトにのし掛かっている『モノ』は、果たして『人間』なのかどうか。

背中全体から感じるソイツの感触はムニムニと弾力の有るモノで柔らかく、しかし芯が有って少し固い。

何かヌルヌルとした粘液らしい液体も否応なしに感じてるから益々厭である。

マトの脳裏に、調理実習で烏賊いかを捌いた時のシーンが浮かんでは泡の如く消えた。

アレは嫌な思い出だった。調理の為とはいえ、人差し指で腸わたを掻いた時の、あの言い様の無い気持ち悪い感触に本気で泣きそうになったのを覚えている。

未だ彼女の身体の上に鎮座している『軟体動物』らしい『生物』は、体制を変えたのか、グリユツ、と不気味な音を立てて身動きする。

其の分、負荷は全てマトに掛かったが。

「・・・かはっ」

『おうおう可哀想に、こんなになぶられたのは産まれて始めてだろ
う。どうだ、痛いか？怖いか？哭きたいか？死にたいか？』

「っ・・・誰、うぎううううう！！？」

マトが言い終わらない内に、声はギチギチと『何か』が彼女の脚を
雑巾絞りの要領で巻き付き、切らんとばかりに捻り、きつく締め上
げる。

剰りの痛みに悶えたマトが上げた悲鳴を聴いて、彼女と『生物』を
囲う人殺し達は愉悦そうにケタケタ笑う。

ただただ愉快に、喜悦に満ちた胸糞悪い嗤い声を。

『痛覚が有るから動きが鈍る。触覚が有るから極端な温度に苦しむ。
聴覚が有るから音に騙される。嗅覚が有るから匂いに惑わされる。
視覚が有るから世界に哭かされる。人間、否、動物は皆面倒な性能
を持っている。そうとは思わんか？脳髓を占める知覚思考きごうを無くし、
外部の命令に従順に有れば、何物にも負けぬより良い存在に生れ
るといって・・・』

「い、ぎ、いあああああ！！！！？」

瞬間、皮膚が真っ白に成る程に絞られた脚からプチプチ、と何か裂

ける音が生まれる。何の音、と引きつった表情で自分の脚を見やる。瞬間、彼女は見た事を後悔した。

見えたのは、鬱血して真っ白になった太腿の上に横一列に並ぶ赤い斑点　　強く捻られた所為で皮膚が切れて動脈血が漏れている　　と、マトの足に絡みつく赤褐色の触手だった。矢筈、この生物は人間では無かったらしい。

少し遅れてマトの全身に激痛が走る。幾ら悶え苦しもうとも、『何か』が行動の全てを制限されて手をばたつかせる事以外身体の自由が効かない。強く脚に巻き付く触手は、まるで罪深い罪人の一切の自由を奪う、鉄と鉛で出来た枷のように微動だに動かない。

「痛い痛い痛いいたいいたいいたい……!!!!」
『おいおい、高々裂傷した位で泣き叫ぶな黒衣。』

『そうですよ。これからモット痛い目に遭うのに、根を上げないでください』

『そうさ、今負った傷よりもっと痛くてもっと酷い傷を体中に刻み込んでやるからな』

優しい声色が語る、残虐非道な言の葉達がマトの脳内を絶望という絵の具で真っ白に染め上げる。

周りはニコニコと無害であると微笑むが、その分厚い面の皮の下に有る仮面は誤魔化せない。化けの皮を剥けば、気狂いの仮面が『壊レテシマエ』と彼女を嘲笑う。

「ひっ……やだやだ許して!ごめんなさいもうしないから赦し

「もうヤダああー!!」

今迄溜め込んでいた不の感情が絢交ぜになり、やが臆て涙と一緒に押し流されていく。子兔の様に静かに震える身体と正反対に、彼女の口は壊れたレコードの様に「ごめんなさい赦して」と同じ台詞を延々と繰り返すだけである。

「なんでも、何でもしますから、だからもう止めて……」

『ほおおぅ？ 願いを聴いて呉れると?』

声を上げたのは先程からマトの上に乗っかっている生物であった。低い声が喜悦で一オクターブ高くなり、かなり不気味さを煽られるばかりであるがどうか交渉の余地は有りそうだと、マトは恥も何もかも捨て、必死になって懇願した。

「な、何でもします! もう、生きられるならそれで良い! だから殺さないで……」

『……不憫な。だが致し方或参て、大の男が寄って集ってこんな小さな小童を誅^{はじ}^めするの……些か理不尽であったな。良いだろう、貴殿の請願、聞入れよう。』

マトには生物が語る言葉の半分を理解出来なかったが、どうやら許してもらえたらしい。彼女の瞳に、希望の光が差し込んだ。もう恐怖と狂気で彩られた世界に居たく無い一心で言っただけだったが、上手くいけば帰してくれるかもと淡い期待を抱いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0436s/>

BLACK ROCK SHOOTER -PHANTOM-

2011年12月16日01時48分発行